

135  
19  
110

東 京 圖 書 館

利 書 門

雜 史 類

三 五 函

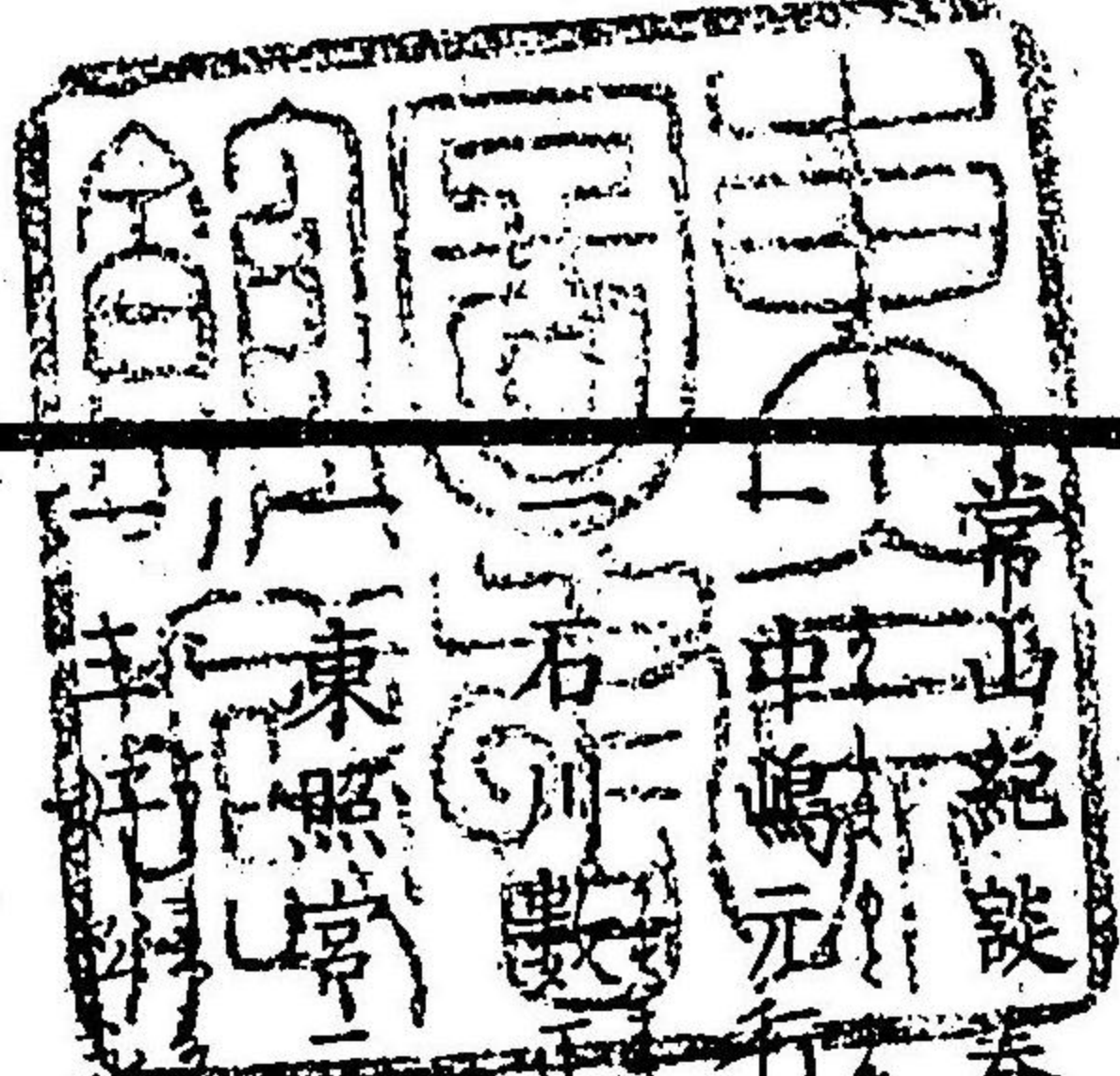
五 三 架

三 一 號

一 九 冊

帝 山 紀 談

三 四



常山苑談卷之三目次

中嶋元行ケ母備中經山城を守る事

石の敷正浅岡某ノ鞆の緒の結び様を習ふ事

東照宮ニ河國一宮城御後卷の事

主神永光源院義輝朝臣と弑する事

一三好實休戦死の事 附 光忠の刀の事

一浦兵部功名の事

一中村新兵衛永原安藝守一騎打の事

一北條綱成地黄八幡の旗を捨る事

一柴田勝家水缸を破りて城を守りし事

一勝家先陣の將とる事

- 一 坪内某料理の事
- 一 大澤左衛門ヶ手の者ども東照宮を窺ひ奉り事
- 一 清洲より東照宮信長公御對面の事
- 一 信長公伊勢の國司と亡し給ひ事
- 一 大久保忠隆功名の事
- 一 高木主水村越與左衛門後殿の事
- 一 太田下野識鑿の事
- 一 北條丹後指物の事
- 一 浅井長政齋藤龍興と軍の事
- 一 丸毛兵庫助軍配の事
- 一 馬場美濃守今河の館を焼く事

- 一 大友義鎮肥前國退口の事
- 一 信長公東照宮を為朝の鑓を進らる事
- 一 姉川合戦の事
- 一 同掛原二の手功名の事
- 一 三井角右衛門生瀬平右衛門功名穿鑿の事
- 一 金松弥五左衛門物見の事
- 一 信長公朝倉を撃つ事
- 一 長野信濃守上野國箕輪城を守る事
- 一 箕形原合戦の事
- 一 同信玄遠謀の事
- 一 同東照宮御退口の事

常山紀談卷之三

備前國 湯浅新兵衛元禎輯録

○ 尼子伊豫守晴久尼子刑部大賀駿河一兵一万をそとく備中經山の  
 城と攻させける此城の中嶋加賀守が子大炊助元行が守る處あり  
 元行僅に二百計の兵ありともちつとも恐るばる頓宮次郎左衛門鷲  
 見九郎二郎一百姓をく二百人そとく寺屋敷といふ地に伏ち阿部  
 左衛門二郎鷲見五兵衛の鬼城といふ處にうゝ置けり敵侮りく  
 あしよき時門を開て打て出相圖の貝をうけハ鬼ヶ城の伏兵後  
 よりまかり又頓宮等百姓に帝旗を立て竹鎗をとりを関の声  
 とあぐる尼子が軍兵ども前後に敵ありとて助け合んとすとも  
 道細く谷深くあふも落ちてみづれけりされども攻具を設けりくみ

した元行が母物の具比上より羽折を着刀を横へ女房二十人計相具  
し元行本丸ある時母出丸と巡り元行出丸と巡るが母本丸と守  
りて士卒の怠を戒む或夜風雨甚しくけき元行百人をとりて夜  
討に出半と道に伏置しうくく乱き入開の声を何げ火をうけて静  
引くくぐる處に敵追ひきくまがあひひゆるぬ徑のうへより伏兵  
どつと起りて敵三百餘うち取り元行に防くもて尼子の軍引くして  
復攻る事ありけり

○東照宮今川氏真と御不快の事起りし時兼て駿河に岡崎三郎君  
とめあうをうひしと生害をききしに聞ゆ石川伯耆守数正此由聞  
てしつひあき御身の失きをききしに御介錯侍人あうん事を  
口惜けきしに数正罷向て眞途の御供にこそ参らめとて唯入

駿府にありしむくぐる處に今川家の侍大将鶴殿が子二人生どしと氏  
真あけきたまふと聞ゆ君の御外祖関口刑部大輔と相まうし若君  
返させしにうんる鶴殿が子返ししうらうさんと望む氏真悦びて中  
若君を返し参らるを數正肩よのせ申岡崎に歸りけきが御家人の  
みや及ぶ國中の貴賤御むしひに参りつてうて感ぜぬものことあり  
けき三方原合戦の時數正に信長の加勢として遠州に向ひけるが武  
田おしよきと聞ゆ返す美濃の守護土岐家に在るといふ浅岡  
の某弓箭とりてさるふる兵と聞へしに彼が許し行此度本國に  
歸りまふ必りち死仕らるる數正弓箭をとり打物とりてうの如く軍  
にあり事度々あり然れども軍に臨むの日躰に緒むまらん様故實あ  
る事と承りしに學ひつて死後躰に緒むまらん骨法を

さうしてさうさう笑ひまゐるんことを敵の上は恥辱とてしつゝ教を奉り  
 度こそよく習ひ傳へ夜を日よつぎく馳下り味方原の軍も殊もま  
 らなく武勇をうまひさうけり其後太閤の欺き岡崎の城と出て上方  
 に登り豊臣家を奉公を太閤和泉とあて武者奉行を命ぜりま  
 ぬ数正徳川家累代の君恩に叛き一生の忠節武功を空しくし血氣  
 既に衰ふる時へ是を戒る事得にありとける聖人の言をうけりける  
 こころうそをけき

○東照宮三河の一此宮の城も本多百助信俊と守りありせり永  
 禄七年五月今川氏真二万餘の兵を以てうまひさうけり其中八千と  
 引りて武田信虎を大将とて後巻の防にせられぬ東照宮  
 くと聞し召早立ち立て一騎がけ馳むるいさむんと見

敵の味方が比ぶまは十倍もあらん殊に信虎の聞ゆる勇将もいと老  
 臣ども諫奉まゐり其理の然るまゝんさきども人の貴賤もよす  
 信義の二よりてこそ身とてさうまひされ敵の城攻む其ま  
 壞まてあつたあんと既味方を入きあきく今さう敵大軍を  
 ばしく驚くまや主の大事の従者が救ひ従者は危難の主のさ  
 ら弓矢も道より今後詰り打まひ屍を戦場は黒まとも運の盡  
 める所ありと仰けまは是を聞人々あつた頼りき大将も此殿の  
 御為のいのちをまけん事露ちり計も惜くまはさきまむ其勢  
 に乗て二千さうりの兵を後づめ打向りをまひ信虎の八千さ  
 ひくさるをよそ見て真直に城をまひあつた城の中きまひ  
 悦ぶ事限る一氏真さう四方と取囲で一人もあまさず討とんと

評定まる其間東照宮の百助を召具しゝのひ城を出て引返し  
 ふ百助今日の戦い身よりけりてそむむくひとて手の者四百餘をりて  
 信虎の軍より合せ打破りて利を得り酒井左衛門尉忠次石川  
 伯耆守数正牧野右馬允康成の後殿とある追りくるはどるるが忽切り  
 くらぐらむ色あつて見へけむ氏真も進み得て東照宮事あり  
 帰陣せしむるをりて此廿二歳の御時あり

○  
 永禄八年三好義継松永久秀大和河内より京へ打入五月十九日辰  
 の刻光源院殿の館をりて乱れ入りけり防が者ども或ハ討まぬ  
 ろのり自害も沼田上野介と福阿弥といふもの敵の相とる竹比  
 葉と腰にさして外よりまきまき入り光源院殿の御前よりりて  
 二人と始りて防ぎ箭仕り思ふも戦ひり其間一日比愛せしむる

たまた早足の御馬を召きて東川原よりけり出させたまひ御運をひり  
 せたまひむぎと涙を流し申けり尤忠義の志神妙ゆ申つるよき事にて  
 も汝等討死しる跡に残りともまるべきやとて散々防戦ひて遂に自  
 害有ける共きり

五月雨ハ露り涙りりてむぎまきつる名をりげよ雲の上まき

自ら筆を把て書残したまひたるとて光源院殿の弟鹿苑寺の周髻  
 とり有る平田和泉守といふ者迎へ遣り北山より出る道より討  
 とり供せし十三四の童忽りる平田を討とりけむ世の人るめ  
 たり

是釋の義俊光源院殿と追善和歌の序に見く扶桑拾葉に見へ  
 くらむる童の名見へる後に信長記を見り此人の姓名を志

るをり小川の住人美濃屋小四郎とて容負世に勝まが供し  
此変にあひく三條吉則の刀を抽て和泉が首と打落し手と  
とよまむ者五六人切らせ腹切て死せし見ゆ

○

三好修理大夫長慶の細川讚岐守持隆の臣より三好の其先甲斐の  
源氏小笠原の族より信州に住せし三好長房の阿波の守護より  
より世々阿波に在り京都に攻上り細川晴元に代りて五畿内のこと  
を執る第三の弟豊後守之長 後實休 其弟安宅攝津守冬康其弟  
十河一存といふ天文二十一年實休持隆を殺し其後室を己が妾と  
し悪逆を恣るに永禄五年佐々木義弼京に攻上りし松院殿を  
八幡に在て防みし畠山尾張守高政佐々木より紀州より泉洲より  
出るより實休阿波より渡海し岸和田の東久米田に陣を久米

田寺に橋諸兄公の墓あり實休墓を堀石の擲せしり出を聞人眉と  
ひそめむしりあるる三月五日高政兵をもち先陣を額が原におし  
出を實休山上より見あるし自真先に進で高政が先陣を打破る檜木  
山に伏あさるる高政の兵に根來法師相加り不意に切てり三木  
内匠一番槍と合せ實休が先陣敗北しり實休の將執り腰をく  
引る者ともと下知し散々に戦ひ残り少く討まはるる實休を根來  
左京打より高政大に利を得河内より入此時長慶が籠りし  
飯盛の城をより攻る冬康兄の吊軍を志し且長慶を救ん為り岸  
和田と打出高政と藤井寺の南葉引野より軍あり冬康勝利を  
より實休討死の刀は光忠が作也信長光忠が刀を好二十五腰を集  
らるる第一の好事木津屋といへる商家より光忠の刀を



残らば見なく此中ニ實休光忠や有と問はるる一腰より出して是を  
 んとし信長何と見しやと問はるるに切先の少缺ては實休打  
 死の時根來左京を斫らるる脚あて當りては承りんと申  
 けし信長よとてしるる

實休討死の時長慶ハ飯盛ヲ速歌ギテ告來ル○古沼のあきこよ野とありて附終てさき實休打死  
 芦の一むとしふ句入々附るひとて其書を披くとてしる  
 びさくあき○古沼のあきこよ野とありて附終てさき實休打死  
 るりと告來きり今日の速哥是とて止べとてさき兵と出さる  
 とあり

信長都ニ攻上る及て松永ハ降参一三好長慶ハ養子義繼ハ河内ニ  
 て自害一三好の家滅亡せり

一説實休ハ泉州岸和田を安宅攝津守冬康ニ守らしめり畠  
 山高政ハ紀伊國廣浦とて所ニ流落の休ありて熊野根來寺  
 の法師をうり催し岸和田へおしよる實休後卷せんて渡海  
 堺の津より勢揃せり高政岸和田を攻んとする兵と城の上より山  
 引とり城を見あらしり四國の兵ハ篠原右京進長房一宮長門  
 守成助等岸和田の大手ニ陣し實休旗本ハ久米田ニ在り高政  
 が陣を見て高政ハ東をさして引退くと覺ゆ遙々爰ニ來て討を  
 らさんく口惜きとあり山上へおしりて一騎中あまきまきと下知  
 まるを摂州高槻の城主入江左近大夫塩田采女正二人京より使と  
 し來り居り敵と小勢ありと見て左のさきひくと今己の時  
 り高政軍配し味方の為り大凶あり唯今くく十ニ十敗北

まづ一暫時を移し東の谷より二手よりあひひき午の時を及て  
 軍をまづむらふ又敵を南山へそびき出さる此二の間を過しといへ  
 ば實休心安れ時を過ぎ敵は利有る一切てくりぬる阿蘇原  
 山を尾傳ひし東北へ下るべし左多くは南へ下り右の尾をへ引と  
 ろぐり入江塩田二手より兵少るは藤原をさすてへんと打つま  
 て伏兵より多く高政夢も知りぬる東北の道に出んと待  
 ちけり討つ女よりぬん高政り物見を出し見付るなりとて  
 南の山に登り横合の突つらまよ高政は籠中の鳥ありて二人比  
 詞を用ひて入江等東北の山まり進んで待居り實休は藤原が兵  
 多りて高政を誘せり長房しきりて進みゆり上の山より  
 根來法師成田玄齋雜賀孫市より實休旗本僅し見ゆ左へまがりて

切てくり勝敗と一時を決まて阿讃淡の三國の兵を引請て一手立  
 るといひしりり實休をうちめりてその戦死まるといふは孫市  
 子細く及ぶと山を下り立真文字より實休旗本より忽  
 實休を捨てまよあびて討つる塩田等の敵をまよも見づれば  
 いろと思ひ物見を出し所より實休討死を下げ来るき高政が  
 陣に切て入討死せりてけりけりけり勝のりける敵をうき受  
 塩田も討死しけりけり残る兵ども塚をさす敗北しけり永祿五  
 年壬戌三月五日久米田合戦より實休三十六歳ありといへり

○

毛利元就豊前門司の城のこゝみを解て引くとき時大友宗麟の  
 士大将瀧田民部只一騎波うち際もせ来る小早川隆景の士浦兵  
 部宗勝船をさすり陸よりあがり瀧田を討つて帰る遠く是と

見る人々を驚かさんとしつゝ元就只一人陸に下がりて必兵部あるべし  
といふも果してさうなりけり井上伯耆と浦と二人勇名世より  
高し二人ともちきまざる物の具をきつゝ又定りたる得道具もあつて  
田を討し時も人の槍をとりて返せしとぞ

○ 佐々木と三好と軍を佐々木に亂し陣に三好の赤山に在り三好使を  
以て中村新兵衛といふ剛の者ありて思はん人あつて出さざりし人  
せもさう戦はんとしひひに佐々木の内を江州よりくまき永原安  
藝守といふ者をまきり出せ修覚寺村石地藏の前へ出あひて永原  
の直槍中村の十文字比槍をて散々戦ひけり永原を突伏首を  
る中村は近江國の人なり一日に槍を合さると十七度首四十一級を  
得たること有り世に槍中村と稱しけり

永原を討し時室町將軍靈陽院殿義昭江州矢嶋より是を  
召感状に朱塗の物比具朱柄の槍をそとく賜りけり  
一説に摂州を半分領し松山新介が士より唐冠金纓の冑を  
きつゝといふ

○ 相摸の深澤比軍に北條家の先陣の大將北條左衛門大夫綱成敗北  
しつゝ旗をひろひ取て譏りけり信玄聞て逃走せし旗を棄て  
てつゝ非し必地利をとりて戦と心づけたるらん旗を棄て  
し罪なりいふべし嘲りつゝ真田一徳齋が末子の源次郎  
は左衛門大夫が武勇より中より旗とあつて練絹  
三幅くら葉地黄より八幡といふ二字を染る物より世に地黄八幡  
といふべし左衛門大夫より傳聞て信玄の詞より恥辱と雪

つり悦けり是信玄遠き慮ありてうらひをまじりて左衛門大夫  
ハ其比さぐまゝなる勇將ありて嘲りつゝつゝと聞て必死の軍なる  
あり其鋒支ぐつゝと察せしめて其憤を散せん為と爲

○ 永禄十二年佐々木承禎柴田勝家が守る所の長光寺の城を攻  
る遂に惣がまゝを打破る勝家本丸に在て爰を専途と防戦ふ郷民佐  
々木が陣よりきり此城の水の手遠く遙る所より水をとひてま  
ごとく切る程あり城へ保つて居ると告ぐをけき承禎悦く水の  
手をと切り切らる城中是に困めどもよめれる色をあらはれ承禎こと  
と見ん為て和平せんとして平井甚介を使ひて城中に入らる平井勝  
家と對面し手水と請缸の水をちりちり小性兩人しりき出さる  
平井手と洗ひて小性残る水を庭にまきり平井帰りて

いへ事のだらひなる故にやあつてあつて城中既し水竭けし勝家  
明日に討て出切死よとんとく諸士をあつめ最期の酒宴を残る  
と問ふ二斛計入るき缸をりき出さる此間の渴を止めよと人々  
汲のしりけし勝家眉尖刀の石づきりて缸と碎り夜明方門を  
開打て出る佐々木思ひもいへる大に敗北しけし勝家首八  
百餘級を得て岐阜に獻ぎ勝家へ猶長光寺より信長感状を  
しりて賞せしめ大方ありて是より勝家と缸より柴田と世に称  
しり

○ 信長勝家とりて先陣の大将とて勝家固く辞し再三志し  
後仰を承りぬとて退出する時安土の城下より信長旗本の士に遭  
つて一行あり勝家無礼とをめり遂に切てまきりけし信長

怒らまけり其時勝家謹々申けり先陣とば是非と申辞  
申へり子細あり辞申へり先陣の大將たる者威權ふき時  
下知行り物ありしを信長詞ありけり

三好家滅し時料理庖丁の上手と聞へり坪内何がしりる者生  
りたる者放し囚りて後菅谷九右エ門賄  
けり市原五右エ門坪内の鶴鯉の庖丁へ云ふも及び七五三の饗膳の  
儀式より者其上子も兩人へ既奉公申ひへり  
ひて厨の事を司とせしを信長聞て明朝の料理させ  
其塩梅よしんると坪内と膳と出さるるを信長  
食し水くきく坪内則坪内と膳と出さるるを信長  
今一度仕らんとも御心は應に腹切んとし信長許容

と翌日膳を出しけり味のうまきと殊の外よし  
けり信長悦く禄あり坪内辱きし昨日の塩梅  
の三好家の風ありけり塩梅の第三番の塩梅より三好家の長輝より  
五代公方家の事より日本國の政をいぬまへ何事もい  
しらず其好む所第一等の塩梅を昨日奉けし御入り事  
マクはけり風味へ野鄙なる風をいへ御入り事  
しり人信長恥辱とあり坪内か詞ありといひあり

永禄十二年四月東照宮濱松に歸りし時  
今川氏真と武田信玄攻落し氏真山家より引あがりけり  
と東照宮父義元のよし遠江と徳川家よりさむり  
信玄よし小田原と相をうて

兩旗（二）信玄と軍まきと氏真と仰られし（三）忝由（四）て掛川の城と  
徳川家（五）とて（六）氏政信玄薩埵山（七）とて對陣足輕（八）せう合（九）あり東照宮の  
先陣駿河へ攻入り山縣三郎兵衛を追（十）わしけ（十一）る信玄前後（十二）と  
り（十三）て（十四）勝利有（十五）ま（十六）きを計（十七）り甲州へ兵と返（十八）さ（十九）ま（二十）けり（二十一）少人東  
照宮を御歸陣（二十二）あり

堀川の城を打過させり時大沢左衛門尉

前永禄十一年東照宮遠江と過半治めり（一）時降参（二）  
り（三）り（四）り（五）り（六）り（七）り（八）り（九）り（十）り（十一）り（十二）り（十三）り（十四）り（十五）り（十六）り（十七）り（十八）り（十九）り（二十）り（二十一）り（二十二）り（二十三）り（二十四）り（二十五）り（二十六）り（二十七）り（二十八）り（二十九）り（三十）り（三十一）り（三十二）り（三十三）り（三十四）り（三十五）り（三十六）り（三十七）り（三十八）り（三十九）り（四十）り（四十一）り（四十二）り（四十三）り（四十四）り（四十五）り（四十六）り（四十七）り（四十八）り（四十九）り（五十）り（五十一）り（五十二）り（五十三）り（五十四）り（五十五）り（五十六）り（五十七）り（五十八）り（五十九）り（六十）り（六十一）り（六十二）り（六十三）り（六十四）り（六十五）り（六十六）り（六十七）り（六十八）り（六十九）り（七十）り（七十一）り（七十二）り（七十三）り（七十四）り（七十五）り（七十六）り（七十七）り（七十八）り（七十九）り（八十）り（八十一）り（八十二）り（八十三）り（八十四）り（八十五）り（八十六）り（八十七）り（八十八）り（八十九）り（九十）り（九十一）り（九十二）り（九十三）り（九十四）り（九十五）り（九十六）り（九十七）り（九十八）り（九十九）り（百）り

手の者ども去年よりあぢぢ（一）とる面々相計り尾藤主膳村山修  
理兩人を大将（二）とて堀川（三）とひ（四）とて一揆（五）とて通（六）ら（七）を（八）待（九）り  
けり討奉入（十）とて（十一）り（十二）り（十三）り（十四）り（十五）り（十六）り（十七）り（十八）り（十九）り（二十）り（二十一）り（二十二）り（二十三）り（二十四）り（二十五）り（二十六）り（二十七）り（二十八）り（二十九）り（三十）り（三十一）り（三十二）り（三十三）り（三十四）り（三十五）り（三十六）り（三十七）り（三十八）り（三十九）り（四十）り（四十一）り（四十二）り（四十三）り（四十四）り（四十五）り（四十六）り（四十七）り（四十八）り（四十九）り（五十）り（五十一）り（五十二）り（五十三）り（五十四）り（五十五）り（五十六）り（五十七）り（五十八）り（五十九）り（六十）り（六十一）り（六十二）り（六十三）り（六十四）り（六十五）り（六十六）り（六十七）り（六十八）り（六十九）り（七十）り（七十一）り（七十二）り（七十三）り（七十四）り（七十五）り（七十六）り（七十七）り（七十八）り（七十九）り（八十）り（八十一）り（八十二）り（八十三）り（八十四）り（八十五）り（八十六）り（八十七）り（八十八）り（八十九）り（九十）り（九十一）り（九十二）り（九十三）り（九十四）り（九十五）り（九十六）り（九十七）り（九十八）り（九十九）り（百）り

過ぎせりひぬ一揆（一）どもあま（二）り（三）り（四）り（五）り（六）り（七）り（八）り（九）り（十）り（十一）り（十二）り（十三）り（十四）り（十五）り（十六）り（十七）り（十八）り（十九）り（二十）り（二十一）り（二十二）り（二十三）り（二十四）り（二十五）り（二十六）り（二十七）り（二十八）り（二十九）り（三十）り（三十一）り（三十二）り（三十三）り（三十四）り（三十五）り（三十六）り（三十七）り（三十八）り（三十九）り（四十）り（四十一）り（四十二）り（四十三）り（四十四）り（四十五）り（四十六）り（四十七）り（四十八）り（四十九）り（五十）り（五十一）り（五十二）り（五十三）り（五十四）り（五十五）り（五十六）り（五十七）り（五十八）り（五十九）り（六十）り（六十一）り（六十二）り（六十三）り（六十四）り（六十五）り（六十六）り（六十七）り（六十八）り（六十九）り（七十）り（七十一）り（七十二）り（七十三）り（七十四）り（七十五）り（七十六）り（七十七）り（七十八）り（七十九）り（八十）り（八十一）り（八十二）り（八十三）り（八十四）り（八十五）り（八十六）り（八十七）り（八十八）り（八十九）り（九十）り（九十一）り（九十二）り（九十三）り（九十四）り（九十五）り（九十六）り（九十七）り（九十八）り（九十九）り（百）り

○

永禄十二年尾張の清洲（一）にて東照宮信長（二）と始（三）て御對面（四）の時他の  
刀持（五）り（六）り（七）り（八）り（九）り（十）り（十一）り（十二）り（十三）り（十四）り（十五）り（十六）り（十七）り（十八）り（十九）り（二十）り（二十一）り（二十二）り（二十三）り（二十四）り（二十五）り（二十六）り（二十七）り（二十八）り（二十九）り（三十）り（三十一）り（三十二）り（三十三）り（三十四）り（三十五）り（三十六）り（三十七）り（三十八）り（三十九）り（四十）り（四十一）り（四十二）り（四十三）り（四十四）り（四十五）り（四十六）り（四十七）り（四十八）り（四十九）り（五十）り（五十一）り（五十二）り（五十三）り（五十四）り（五十五）り（五十六）り（五十七）り（五十八）り（五十九）り（六十）り（六十一）り（六十二）り（六十三）り（六十四）り（六十五）り（六十六）り（六十七）り（六十八）り（六十九）り（七十）り（七十一）り（七十二）り（七十三）り（七十四）り（七十五）り（七十六）り（七十七）り（七十八）り（七十九）り（八十）り（八十一）り（八十二）り（八十三）り（八十四）り（八十五）り（八十六）り（八十七）り（八十八）り（八十九）り（九十）り（九十一）り（九十二）り（九十三）り（九十四）り（九十五）り（九十六）り（九十七）り（九十八）り（九十九）り（百）り

今日の會ハ大事ニ非ズ心安ラズ一ありつとよき士何ぞひとぞ感ぜし  
まける莊左エ門後出羽守といふ

○永祿十二年信長伊勢の國司北畠中納言具教を大河内の城に攻る數  
月経く城強くしつちつともひろき信長織田掃部介を使しつて信雄  
を以て具教の子具房の養子とすつて和平とすしつていふをきつて人  
質ととるしつて同しつて和平とありぬ信長岐阜より二男茶筍九十  
二歳ありしが士あまきつて伊勢へ行大河内に至りて國司に對面し  
船江より具教の世を具房に譲りて三瀬といふ所を閑居せしむしが  
尚信長に背く志ありけむ信長國司の家の者どもをくつてひ天正四  
年十一月廿五日三瀬にて弑し具房に信雄の養父ありけむ大河内あり  
くめく置まけり天正十六年死去其元祖親房卿より具房に至り

十世に及ぶるも具教の弟南都東門院の住僧ありけり具教弑せ  
しつて聞南都を出て伊賀に赴き還俗しつて北畠具親と稱し  
三瀬河股多藝小梨の諸士をくつてひ仇を報ぜんともいふ引あ  
しつて中國に流落し毛利家とすつて備後の鞆に居りけり具親兵  
を起す時天正六年信雄の兵波瀨峯の城を攻め六呂木山副  
波多瀨三郎此三人を生とりけむを死罪にまふきと議せしれ  
郎が容貞世にまふきしつて信雄にまふきしつて三郎をく  
三人同く生どられ罪又相同し二人死し一人とすつて事面目し  
しつて誅せしむしつて二人の年老ぬ惜む身非ず三郎の仰  
従ひしつてまふきしつても聞入を遂に三人とすつて磔しけり時三人  
君の御為に命をなすつて士に思ひ出面目しつてまふきしつて事ありし

謡々々々物語して誅せしむる三郎此時十五歳なりまぬ人あり  
しりへり玉井新次郎としり者具親の心と合せ信雄の背しつ父  
兵部少輔と母とも神戸に居りしを捜出して櫛田河原にて  
磔せしむる兵部少輔子の新次郎を呼て汝今度君の御仇を報北畠  
の家を與さんと志しけるは士の本意吾生前の悦ありとて水を乞て  
父子三人盃とくしりて其後殺されしを織田家の刑罰仁者比  
道ありて其暴逆終を令せざることを尤とて有りあり

○永禄十二年今川氏真遠州掛川の城没落の時天王山にて合戦  
大久保治右エ門忠佐敵をつまらせ甥の新十郎忠隣其首とりて  
汝が功名せしむる呼りけむ忠隣十七歳あるが人のくまたる首何  
りうまむきとて敵の中より取りて首をとる箕形原より諸軍散乱し

て東照宮につき奉る人少かりし御側をもちて後へ歩立より御  
供けりるを小栗忠藏敵の馬をとる來りて乗せし仰有て其  
馬に乗て御供やけり後相模守とやをへ此人あり

○遠州の事ありし頃の時軍や東照宮の御内高木主水  
清秀村越與三左衛門とて聞ゆる兵二人味方とて細ありとて志  
つくと引退く處に敵十騎が追來る高木槍あり直一足由  
引まりきると呼る村越弓一箭をつらひ槍を射し心づくと槍を  
せきとひひけむ敵ありむやえ兩人又引退くこと敷度及  
べりうくと左右沼より一騎うち地よりありてをよき所といふあそこ  
そり高木より苗り先うけむ敵をつき伏しむ村越六音あげ其首  
とせしりふまた敵一人射倒し敵ひるむ所と高木より進で又一人つ



きふをひきき村越も又一人射倒てそまきり追ひまを心しつる引とりけり

清秀へ水野下野守信元へ屬せし時三州折屋の戦ひ度々功名あり後徳川家へ仕水野へ屬せしとき石ヶ瀬といふ所にて三河の兵と槍と合まると一日七度石川伯耆守十七歳にて内記としひくが互に名のりて槍と合せ相引くとありけり長久手の軍も清秀内藤四郎左衛門武者奉行とありき清秀老年の後関ヶ原の時隠居せしが野州小山へ参りけし度々の功名を仰らば台徳院殿錦の御羽折を賜りけりとぞ戦國の時も一日七度の槍に穿るるとあり高天神小笠原與八郎が士林平六郎遠州豆大寺にて六度槍を合せ信玄伊豆韭山と放火し山縣をあきへし置まると城兵打て出引

とりの口は三河の浪人河村傳兵衛四方の船の字にさし物と敵と追ちりし槍を合まると一日六度とあり

○太田三樂が内は太田下野といふ士よく人を識る其詞たゞざりし三樂の故ぞと問下野別の子細もひびくとぞ速歌なる者の古歌を覚ひへり速歌の益とせんともあり士の功名を志す者も又ありあり其人々の嗜好所よりて察むべし八九のひひひぬものありとぞ答ける

○北條丹後一尺四方の白練と黒き蟻を繪し書て指物と名けり謙信見て汝がさし物何なりと小さきものありと問わると丹後誠味方よふといふとけりけり進むと先がけり退ぐといつらも後殿せん他人の大なる指物も此小四半と敵の見る所へ

○ 同くうんと存まらざりしとアセバ謙信ことつらありとしつとせしとて  
 浅井備前守長政玉淵川とらきりて齊藤龍貞と軍をある時長政  
 五百計の兵とまくり関原野上の宿火をうけ樽井の前ある小川に柵  
 の木やひて待つげしと龍貞一万をくりて出ると長政聞て百人をくり  
 と菩提の徑より敵の後へまらうと自四百をくりて以て敵のあつとて  
 夜討にまくりけり徑より兵もよせ來り思もよぬ所より関の声をた  
 びしと龍貞内通の者あると思ひあつて岐阜にひき返さ長政大  
 垣の邊所々火をうけまをけま龍貞敵勝を棄て大垣を攻るまんの  
 とまひしと岐阜を出しと長政やぐり引るを時足輕の物よあまて  
 と三十人樽井の土民の家よりとと龍貞樽井に入て士卒も疲しと  
 兵糧つらとあつとけり時つらと足輕ども所々火をうけて焼とる

○ 長政思ひよよぬ所へあつとせと散々まらち破りやぐり南宮山に登り  
 て敵とまら龍貞二度まで敗北一口とて思ひて四面ととら巻てあま  
 さげとんとあつととら長政見て敵の大軍より十死一生の戦とて是  
 ろうととら下知るき内ハ箭の一筋も射とらとらひて攻とらと  
 待つ山の上より一文字と切てとら龍貞大に敗軍し是より長政  
 と恐まて復軍まらととらとけり

○ 丸毛兵庫助長住其子三郎兵衛長隆龍貞に奉公して美濃の多藝郡  
 大塚の城に在り其藤伊賀守氏家常陸介龍貞に叛て大塚にありと  
 る兵庫父子三百をくり大塚より一里をり出て陣し城近き百姓老若  
 男女とつらとら催し手々竹竿とらと大軍の体よりてとら  
 と氏家を撃破りしと安藤等も又龍貞に降参し丸毛父子と禄と

増一感状をあらはしきり

○信玄駿河に攻入時朝比奈兵衛と始とて軍をふる者あり今川氏真とらとて信玄とて今川の館に馳行て名物の寶りのとも奪とり來まると下知せし馬場美濃守信房聞もあへて唯一騎鞭と鎧を合て館より入火をうけて焼もひたり是宝物ども奪とりて貪欲の師ありと嘲るんことを慮りしるあり

○元龜元年の春大友左衛門督義鎮肥前の龍造寺山城守隆信とて隆信和を乞ふ大友兵を加へて肥前と筑前の堺に千栗とて大川あり吉岡下総の入道宗觀とて人者竜造寺の大敵あり勝負もつるを故多く和を乞ふ謀あり千栗とて事なむとてとり義鎮も尤ありとて豊後の留守に置る佐伯紀伊守惟教其子彈正

少弼惟真田原近江入道紹恩を呼よせ六千の兵を二陣とて千栗の渡に備へて川をさる隆信もさるりて敵の引退ん所を不意に撃んと謀し大友の設あることを聞て追ひさるり

○元龜元年六月信長朝倉をうけて龍が鼻に陣を東照宮援兵の爲世四日江北に御着陣評定の時信長槍を持出て此槍に鎮西八郎の鉄より徳川殿へ源氏ありとて明日の軍に勝利ありといふもさるり今の虎の皮をびとやの御槍是あり

○姉川の軍に信長の龍が鼻山を左よりして浅井長政も向ける東照宮の龍が鼻を右よりして朝倉が二万ありとて向せし時小笠原與八郎氏助二十どより先陣に進で川を渉る氏助が兵仗木久内中山是非之助吉原又兵衛林平六伊達與兵衛門奈左近右エ門渡邊金大夫照七人

槍を合ひける中より渡邊ハ朱の傘と金の短冊十八つけるさし物さき  
一堤の上と進む信長見て其夜召出して天下の槍をとりて感状  
貞宗の刀を添てつくる残る六人の者ども憤て各槍を  
合せしむる畠の中より故見とめらるるをゆきしむる六人とも  
信長感状をとりける

○ 姉川より酒井左衛門尉忠次先陣より二陣ハ神原康政より酒井と始  
小笠原與八郎菅沼新八郎奥平等川を渉てよりけり岸高く上り  
うねる處ハ神原真一文字よきむく上りくまき岸を無二無三  
ありあがりよとえいとくくとしひくわらちがり酒井が先よきまんを  
るを見て酒井が兵あつてくハ無念ありと競りて利を得たり東  
照宮神原が二の手はくく以来の手本より二の手はくくこくく

くくくと仰りけり

○ 姉川の戦ハ坂井右近少子久藏十六歳より討死を久藏ハ十二の時  
信長始て京より入り比近江北郡より槍を合せる剛の者より三井  
角右衛門生瀬平右衛門二人とも久藏が首を得たりとより二人後閑  
白秀次ハ仕へけり此事沙汰けり三井がしつよりありと鷹部屋  
ありこめおきく罪ハ行つてんを三井のうを惜む非を人の功名  
とめをくる悪名の子孫恥とらんこと口よりけり今一度詮議  
てたまりく證據ハ浅見藤右衛門ハ問き實否正しるべしと  
訟より浅見と安土より呼きけり浅見ハ生瀬と久き友より三井  
日比中より不通なる疑ゆるく三井がしつより定るく三井  
惑乱し浅見と證人よりあつて誹笑ふ人多くけり聚樂の廣間

奉行列座して雀部淡路守とて尋問る浅見承り生瀬八年の  
 知音より三井とて不通とて是非世の人此評せんとも迷惑あり  
 他人に仰付らるるも懇に辞しや中よりぬ三井が虚妄とていつ  
 心よりぬの理あまも證人よりひきこる上ついとくすを勤らるるも  
 猶辞しや秀次聞て重て辞さるるも其時浅見今も  
 己事を得まむ武義の論少ゆ詐偽ひまら坂井が首の三井がとうる  
 ともまらるるも又其とも比類少くひ生瀬の何と存過るるもや  
 としひきこるるも一坐駭てとていふ人多くともよりて三井を赦て賞せ  
 らる生瀬の秀次を寵せらるるの故に罪に及ばず右近の信長の大將  
 あり三井生瀬の朝倉浅井両家の士あり浅見も後京極高次の仕  
 へて大津の城より武名とあはれりけり

○ 信長浅井長政とて時長政が木造の陣俄にさるる体の見えりけり  
 猪子兵助と物見よりやらせけり又金松弥五左衛門とも出きせけり  
 猪子馬より白あゆるるせり馳歸り敵に引退けりといひゆりけり金松  
 乘歸り敵よりよせむといひまらるるも又先陣のゆりけり捨を合せり  
 信長のちより二人と呼て汝等見し所はいつと問つるも猪子敵を  
 荷つける馬と遙に遠く引のけひるるも引退くと見てみたり金  
 松承り見る處に猪子も同しといひまらるるも軍を志し長政ゆりけり  
 しく空しく退くへきやあはれけり戦ん為と存しひきとせり  
 信長大にめらるる

○ 信長越前より攻入時朝倉義景二万計の兵を刀根山といふ大山の  
 陣より麓より信長の先陣ひく居りける日信長井櫓より上り敵を見

了敵ハ今夜必引退く先陣の者どもあつて使と度々  
中々下知せざる是を聞て殿ハ仰々ハ仰々ハ敵大軍こそ山  
據り地の利を得て且主戦あり何條引退べきとあやしくけり夜  
入りくも信長ハ猶井櫻一在敵陣を睨て目ももろく有しが  
丑の刻なりとまらや敵ハひくをとりあつてあは螺うきこそ  
馬に乗先陣の大ぬる山のちをさやせんし旗本の者ども功名  
せよとて真一文宇まさまれ果しく先陣ハおくも信長の旗本  
よく勝利を得らむけり信長常におくる者と大ぬる山こそ  
しとて

○ 上杉の舊臣上野の長野信濃守業正ハ在五中將業平の後胤あり  
とりて世々上野箕輪一在り此城ハ大名明神の山北尾崎とて

城の郭とて郭の形箕の手に似たりとて箕輪といふ上杉家衰け  
獨立して武威をうけ信玄ハ屬せしを信玄こそを攻ること五年終  
一度もあつてとて病比後二年と経て落城せしり

○ 元龜三年信玄參河遠江一軍を出り二股の城とてり巻水の手と  
切りけり中根平左衛門力の限り支へけりも竟りうめり  
城落りけり信玄こそを信玄ハ箕形原一軍とて濱松ハ織田家の  
加勢も有と信玄聞てそく来て客戦ハあつてきとてあつてあつ  
つみやとり處ハ三河武者城とてり出まきと聞えけりはけり一戦  
及ぶと備くあり有濱松の軍兵日既ハ暮るんとまきとてり  
りく一軍まきとて口々ハヤを鳥居四郎左エ門物見一々乗帰り人々  
のいんヤめとも今日の御合戦ハ然るべし敵ハ大軍あり先陣

使をやり兵をあひさせりし是非御一戦とあるに敵あつたの郷にお  
しやん處をあひむくらせたまふとナま東照宮聞し召汝の用も  
ころなき者と思てけふの物見にやりし何とてあつたや目の前  
敵をあめくと通しける生むもあつた怒らせり四郎左エ門承り目  
のあきなる故にこそ勝敗の利害を見きらめて申し御敗軍を  
し召御くりし殿の御心のまゝあつた勝敗の道と知ぬ人  
あつた者よとの外に罵りしをこそつて乗出し成瀬藤藏を尋けり  
功名あつたとき即ち討死ししけり

味方原の前夜手つけを定らる時成瀬と鳥井と先後と争ふと  
あつて既に刺さる死まき色にけりし人々あつた  
と成瀬鳥井成瀬に向ひて明日信玄と一戦けりし織田家の

援兵も来ぬ士一人も大切の時ありし私の争論して死んば不忠を  
らふや二人とも犬死し殿に損けり奉らん明日の軍に功名を  
べしと討死せんはりし成瀬もろしひひりしもヤきとるくあ  
つたも左に思へ明日討死せんはりし酒をくく深更に及ぶ  
東照宮に事をあつた成瀬に信長の加勢の目付しとあつ井  
本坂に向ふし鳥井の濱松先陣の目付せしを仰られける二人の  
必死と期しし鳥井も一騎あり二騎先けり二万餘の敵に馳  
向ふ鳥井曾首三つと成瀬も首三つと行ちひ共打りし  
て首を抛り又け向ふ鳥井又首と成瀬とと只今山  
縣陣にけり討死し敵其首をとりしを聞て成瀬先  
づきよ汝はと帰し明章にけりし従者よひし信玄

の旗本をさうくけ入んとせしと土屋右衛門ヶ手の者どもも  
くみけり鳥井へまゝさきくさき剛の者く三尺餘りの野太刀  
を打ち死狂に切て廻る土屋ヶ曹を破よふみくと斬りくさ目  
眩て馬より落る多兵四方より槍ぞりく鳥井を打ちく敵  
味方もあゝあゝく惜みあへり

渡邊半藏守綱も物見して馳歸り是も味方中々危く先陣とよび  
返つてなまなくさきも壯士等しきくして柴田七九郎大久保  
治右衛門もみゆくと半藏ひく止ましくも聞入まき甲斐ん  
先陣小山田一向て足輕さくる軍始りく先陣さき足よりけみ  
石川伯耆守数正馬より下りく槍を提げ一足も引まきと呼り一陣  
の士卒各折ちきく槍さきを作り待りく甲斐の兵競りく

近々と引受一同よ立ちあがりあつくと声とあけく追うを外山小作一  
番槍を合せく日暮りも甲斐の大軍進くる東照宮御旗本を  
ひきりて切てくさき遠江の山家三方小山田追立られ破けり申の  
刻より軍始りて夜ふくるまきの軍も衆寡支ぐく崩さく  
柵原へ東の方西嶋一向く引退く信長の侍大将平手汎秀へいりて  
り所より返合せ討死ま鳥井四郎左エ門と始りて河澄源五郎  
長谷川紀伊守加藤二郎九郎等退兵三百餘人討ま敵さき追來る  
本多肥後守忠直後殿して敵近付をくさく討死ま甲斐  
の士大将秋山伯耆守晴近透間多く追り奉り御馬まき残り勘  
くさく東照宮御馬をひきくさきせられし時夏目次郎左エ門吉  
信く御討死の時くひつぎと御馬の口と濱松の方へひき向



け槍とくろくろわー御馬のさんづとた〜く〜け〜とまきけは御馬の  
け出ぬ夏目う〜と〜多勢と〜と槍の柄の折る〜と  
戦て討死と

夏目へ濱松の御留守〜矢倉より軍の様を見くり〜馳参り  
〜御城〜帰ら〜と〜吾城下〜於て打まけ〜のち  
生て何〜せん〜御馬副の者口と〜仰せら〜と吉信御  
馬の口〜下知〜馬〜飛下り御講とた〜へ  
討死仕〜御馬に付〜畔柳助九郎〜下知〜御馬と御  
城の方〜ひきひきせ槍の柄〜御馬のさんづと〜取て返〜  
十文字に槍と追ひ〜敵と支て討死〜の〜是より前三  
河一向宗一揆の時彼宗門と信〜入〜と相あ〜櫻井の

松平監物上野の酒井將監大草の松平七郎ゆ〜中〜夏  
目次郎左衛門〜一族も多〜彼宗門〜徒黨〜已か知行  
所〜要害と〜と松平主殿助伊忠不意〜あ〜  
せ木戸と打破り攻〜夏目防ぎ〜ね幣藏の中〜入り  
〜殺〜籠の中此鳥と殺〜似〜と仰有  
主殿と殺〜後〜物と〜人数と引〜夏目  
岡崎の方と〜拜〜仁愛〜殿と楯〜と  
〜と其日〜宗門の本尊の前〜参り〜殿の御為〜と  
〜と義死と〜又一説〜  
夏目大津半右衛門同伊織乙部八兵衛等六千餘額田郡野田  
の〜城〜籠り〜深溝の城〜松平主殿助伊忠是

と攻る乙部へりて一向宗に非ざり夏目と無二の知音と云  
故同くくりて遂にゆるきをべりてざることを察し夏目とてをけ  
ん為に久留善四郎と相なり伊忠に内通し寄手と引入るべ  
半右衛門へ針崎へあち行夏目へ藏の中よりとて乙部夏目と  
助けんと伊忠に乞ふ乙部が朋友とてとざる事を伊忠感し夏  
目も又武功有り者ゆへ藏とてりまきく此旨をるべきやけまを  
御赦有りけり夏目愚く一揆にくくを後悔し藏より  
出て伊忠に降参しけるものなり

水野左近大夫もひきはかり支へけりも敵猶きとひくく又御馬  
とひきくさせたまふ成瀬吉右衛門日下部兵右衛門小栗忠藏為田  
治兵衛歩ざりて御供を敵六七騎とてみ來るを成瀬一騎切て落し

御馬とくさをりて六騎へ追とまりぬ大久保新十郎忠隣御馬の  
くえとて奉る大久保七郎右衛門忠世きのかかけの邊に御旗  
とちり立敗軍の味方とあつむ其ひきく演松に引とてをたまりけり  
敵城近くあり寄る鳥居彦右衛門元忠玄黙口より討く出相戦  
ふ渡邊半藏兄弟勝屋甚五兵衛櫻井庄之介名のりけり槍と入と  
敵五人討くありける敵を追もふ石川伯耆守と大久保七郎右  
衛門と相なり鑊炮とつるべりてよりとてはさるべつ寄る  
敵も皆引返る味方疲るけり天野三郎兵衛大久保七郎右衛  
門と心合せ敗軍の中を求め鑊炮只十六挺ありて引具し  
信玄の陣さうがかけし向ひけりちうけりて甲斐の軍夜合戦と  
うららとあつてくく案内をりてさうのりかけり

落る者其数をたゞず

又一説、其夜酒井左衛門尉忠次今夜武田の軍兵疲乏しん必  
定より夜討せんといふ志のびと出、信玄の陣屋此様を見せらる  
爰より何色の旗の終ありしと云ふ色の旗を立てしといひ  
けつと忠次聞て疲乏する兵と後陣を引退け後陣を先より  
くくるあり信玄の慮浅く夜討のせきりけり後より  
其夜信玄の士卒一人もあはざる者ありしといふ

夜あけて信玄兵とくくしてあさるべし越年あり是元龜元年十二月  
廿二日遠州箕形原の合戦あり  
箕形原の軍終りて皆濱松の城を攻んとしひひけり信玄勝り曹の  
緒とあむるといふて有とて軍とくくしけり此時信長の白須賀

毛利河内守山中、瀧川伊豫守吉田、稻葉伊豫守其兵三万  
あまう、くくあまう、信玄勝り乘て引とくくし信長二万五千  
をひきふるてきよせ毛利瀧川等も思ひゆゑ所を打てくるを  
うら心濱松より切て出中にとりあて軍せんと吉田より岐阜  
で一里一人の志のひの者をたみけり待せけり信玄ひき返さし  
より信長の謀空しくありぬ

味方原の軍は甲斐の兵をたみけり追ふに、東照宮幾か  
とあり御馬をうけ、大久保五郎右衛門忠次手負て歩  
より、菅沼藤藏定吉、詞とくく忠次を馬の前輪の  
て退りけり後、菅沼長光の刀を賜りて賞せさせたり菅沼  
又引返して追くる敵を防げり天野康景長坂源次郎坂部又十郎

等ゆ少くともまうて防戦ふ大久保相模守忠隣此時新馬を射り 十郎 歩どち成て危うくを御覽後忠左衛門 新 十郎武者あり 助けを仰られ久次己が馬忠隣と 抱きのを引退く敵透間追つり奉りける武者ありけるを野 中三五郎重次返し合せ討とう後信國の刀を賜りぬ畔柳 助九郎御馬のくを後金の肩を賜りて賞せり 猶敵手あぐく追つる奉りけり水野太郎作ふりて防戦ふを 御覽しく又御馬を引返成瀬吉右衛門正一兄弟寂後波此 案内あまり御供しく恙なく引とを奉るき由云 御側つぎ奉り 引返しく敵を追終り濱松の城 入らるる鳥居彦右衛門元忠御下知りて玄黙口の御門を

ひき引とる兵を入敵あふ来るも 城よく まく討入へきや門を閉火を所々たくべし 仰ら此日天曇り雪ちり寒氣殊甚し御供して馬より下立城中入る人 松平八郎三郎康定松平弥九郎景忠平岩七之助親吉大久保忠隣菅沼定吉都築惣左衛門秀綱等都築妻粥と持せ來りて 御供の人々後衣服を賜りて賞美あり今日敵の跡を うんで戦ふ勝味方をやり 過て心敗軍ぬ口惜きことあり と仰せあり湯づけ飯侍女久野奉りけり 三度へ 御睡あり山縣城近く攻入を門の扉を 暇あり覚り 攻入をやとしつを馬場美濃守きり 打引とる 門とち橋を引へき 左ハ

あつくり火白日の如く謀あるべきあり攻つて徳川殿  
の海道一の弓より見届てこそ猶豫する處に城中より  
鳥井彦右衛門渡邊半藏同半十郎櫻井莊之助勝屋甚五兵衛と始  
とくくろきやうの剛此者ども百餘人突て出る甲斐の兵虎口を  
引退て攻ざりけり

常山紀談卷之三終

常山紀談卷之四目次

- 一 山崎長門守訖美越前守討死の事
- 一 中川清秀和田惟政と撃つ事
- 一 梶川弥三郎禎島先陣の事
- 一 山内一豊馬を買事
- 一 奥平貞能父子帰降の事
- 一 東照宮大井城御退口大久保忠世高名の事
- 一 渡邊守綱と捨半藏とり事
- 一 謙信單騎佐野城へ入り事
- 一 大河内政房節義の事
- 一 鳥居強右衛門忠節の事

- 一 酒井忠次 鷗巢城と乗取事
- 一 長篠合戦の事
- 一 内藤四郎左衛門返答の事
- 一 多田久藏の事
- 一 佐久間信盛偽て勝頼に降る事
- 一 二股城攻内藤櫻井功名の事
- 一 蘆田信蕃二股城と退く事
- 一 信長公秋山伯耆と刑し給ふ事
- 一 松平忠次諏訪原城を守らる事
- 一 山内治太夫進士清三郎功を譲る事
- 一 長九郎左衛門能登の國發向の事

- 一 越中より謙信月を賞せし事
- 一 信長公松永彈正を恥しめ給ひし事
- 一 山口六郎四郎奥田三河守高屋城を落る事
- 一 長坂釣閑跡部大炊邪候の事
- 一 東照宮勝頼と大井川より御對陣の事
- 一 栗田刑部幸若々舞所望の事 附 時田々首實驗の事
- 一 岡田竹右衛門見切の事
- 一 朝日千介西郷伊豫を討つ事
- 一 菅沼定盈膽氣附 山口五郎作後藤金助討死の事
- 一 岡崎三郎君の御事
- 一 摂津國花隈城落る事

一高天神落城仁科信盛戦死の事

常山紀談卷之四

備前國 湯淺新兵衛元禎 輯録

○天正元年江北の軍は朝倉敗し信長の兵追事急なり朝倉が士  
大将山崎長門守訖美越前守柳瀬より支へけり  
まを返り合せり討死する者多し山崎も大軍の中より入て討ま  
けり訖美矢立の硯より出り詩一首書きて落ゆく者多し故  
郷より久しけり

萬恨千悲有、驀然誰識、今夜入、黃泉故園更、莫灑愁淚、屍暴戰場、  
唯是天

うつく散々、戦て討死し、其間、義景の、得て越府、ひき

○天正元年將軍義昭織田信長と不和の事出来て和田伊賀守惟政將軍の味方しく摂津の國に陣を信長和田を始として誰某が首とらん者あり可賞と書記して札を立ちし中川瀬兵衛清秀此時ハ荒木村重に属しけり此札を打見筆とて和田か名と点をとり自姓名をとり家へ帰り妻に向ひ事の由を語りて万一生て帰りあは又こを見参まべりれといひて妻聊患る色ありけり軍の門出祝ひまへとて羨まめ酒とり出しけり其夜子の刻をうり伊賀守が首とらん來りけり村重大におどろきけりやまらう和田と討得るをいひ清秀さんハ明日必戦を決まらんさまぶ討る者少くを同じく死むのちと此夜の中に入るといふ和田が首とらん得つて敵も明日の合戦を大事と思ひ淀河

の浅深をうり見んは惟政さる大将あり物見をよのむべし自ら來らんハ必定ありあつても討とらんむ物をとり又討死せむ多くの敵の中に入て大将の首とんとて討死しとて入いそんハ武名ハ朽と思ひ定め水をこりて岸に柳がけりけりてまぶ案此如く和田二陣より出て出來るをまきこ入り終りけり水の中へ飛入のがき得て歸ぬとやなれば人々感あへること大うらな

○天正元年信長靈陽院殿を宇治の楨寫の城に攻る時折しも雨ふりて川水岸をひくせり信長馬を水涯に駐て昔の梶原佐々木も鬼神もいよりのあつてしる處に武者一騎川へうち入るを見て梶川弥三郎高盛あつて梶川討まふ下知してとまらり



先づとうち入てつてけり此戦の前は信長黒の馬を梶川よりく  
らる其時信長梶川が志重の軍に真先をんぶる者ありとあざ  
笑ひていひまてつて其詞をいひけり

○  
山内土佐守一豊其をめ織田家の仕へけり東國第一の駿馬を  
りて安土に牽來ておきける者あり織田家の士是を見るに誠無  
双の駿足あきど價あまう貴しとて求むき入るくけり牽  
て帰らんとき一豊其比は猪右衛門といひけり此馬望に堪えれ  
どもいふも叶ふべからず家へ帰り身貧きほど口惜きことあり  
一豊奉公の初よりあつてまうる馬に乗て屋形の前へ打出き物と  
とひりていひまてつて妻つて聞て價いひけりいふと  
黄金十兩とこいひつれと答ふ妻聞てさかどし思ひみらんう其馬求

たまへ其料とてあつてつて鏡の奩に底よりとり出ると一豊が  
前より置り一豊大におどろき此年ごろ身貧しくて苦き事  
の多うし此金ありともあつてなすつて心強くも包にまひけん  
今此馬得べしと思ふよとてきと且に悦び且に恨む妻仰の言に  
とらりていひまてつて此御家へ参り時父  
此多みの下へ入まはせひけり常のこともゆり用ひけり  
を汝が夫の一大事とけん時よまをよと戒ふまひはきされば家の  
貧しきも世の常あるが堪忍ても過ぬし誠今度京より馬揃は  
るべしと承りて此事天下の見物あり君も又つての始よりよき馬  
召て見参せざるをまうさんと存ひてこそ奉まといへ一豊悦ぶに限り  
頓て其馬求てけり程よく京より馬揃あり時打乗て出ると信長

大ききおどろきつらき馬やぐ事ことの由聞きこなむい東國とうこく第一の馬遣うまづき  
 二ツ分方ふたぶんかたよりひききく来りきを空あきしく帰かへさんハ口くちをき事ことぞとよそれ  
 二年比山内にねんひさんないハ久ひさしく浪人なみのりと有ありと聞きく家いへも貧ひんしくんも未得みえ  
 ともハ信長のぶながが家の恥ちとをききくる弓や箭やとも身みのくも是こゝは過あやま  
 ることやあまき感かんは是こゝより次第しだい一用いちようひくまことぞ

○

天正元年三河作手筑手の城主奥平監物貞勝入道々文其子美  
 作守貞能孫九八郎信昌皆勇氣ぶきしくき人ひとも有あり近ちかざ道みち  
 文ハ武田家たけだの心こゝろとよを勝頼かつらの士大将しだい甘利あまのりと作手さくしの本丸ほんまるにおき  
 奥平父子おくへいハ外郭げいかくあり信昌のぶまさ信玄のぶひらの死しする事こととくを悟さとり  
 居いる處ところ東照宮とうしやうみやうより本多豊後守ほんたあぶし廣孝ひろたかと以もつて帰降きやうのこととす  
 たまふ信昌のぶまさ父ちちと太父おぢとよきりめて密約ひそやくとるを武田家たけだ奥平おくへい人質ひとぢ

と出せよと下知せしる貞能のぶよしは謀まくく庶子しやくし千九十三歳  
 多おほりけつを黒屋くろや甚九郎しんくわうとそく出いたり東照宮とうしやうみやうと不意ふいに襲せまひ  
 打うちぎ謀まを家臣けあしんを以もつて告奉つげほうる武田たけだも是こゝをいやしく土屋右衛門直つちや  
 村黒瀬むらぐろせに在あり使つかを以もつて貞能のぶよしを呼よぶを勝頼かつらの檢使けんし城所じやうじよ道壽みちじゆうも  
 出向いしやうハ二心にしんあるより聞ゆる處ところより來きりしけるよ神妙しんめうとことと詞ことばを  
 くる貞能のぶよしくる時ときハ父子ふしの間まも疑思ぎしふて世よのあひあり然しかども由よし  
 愛子あいしよてハ千九せんくわを人ひとおちし出いしハ何なにの子細こまの有あるべきやと駭おどくし  
 るけきばいさ甚しんとらんといふ貞能のぶよし心こゝろあつる甚しんとらん終すまり腹はら乞こし  
 門外かどより出いるを道壽みちじゆう又またよひより湯漬飯ゆぢいひと出いし貞能のぶよしと食くむ  
 ひまも道壽みちじゆう士しを門外かどより出いし待居まちる貞能のぶよしが士しに向むかひ主人しゆじん叛逆はんぎやくあ  
 りつ唯今ただいま討うちし由よしをいせむと奥平おくへい六兵衛むつべゑうちとくひて更さら

に駭くしつふ一こまの貞能素より武田方よりしつあることとすいひては吾  
首を見ざる中ハ驚くことありきと固くしひふくめ一故ありけりとた  
かろりなきましく貞能馳歸り其夜一族打具して退散一岩寄に赴けし  
バ松平主殿助伊忠本多豊後守廣孝等東照官の仰を奉り出迎て  
瀧山より引とりけり

○天正二年四月東照宮天野宮内左衛門景貫大井の城を攻まを  
たまふ時霖雨より兵糧運送の便よき三倉の砦よりひきとるさゆ  
處を天野討て出つけあさり高山光明の城より由出あひ田野大  
窪の郷民も相かりしころこより鑓炮をうちあひ声とあひて攻り  
る後殿の人々討まをさる一めきを東照宮三倉より聞  
し召引返さるるまへに敵引とりしり玉井善太郎後殿しひる

か股を鑓炮をくくを御あをさあむく三倉よりあひけり手負  
るがゆに鑓炮の音せしとあやしく思ひし軍有けるよ此馬に乗ま  
と仰りし御馬よりありきせあひけり人々君の士をしつるをたあ  
感ぜざる者あり大久保七郎右衛門忠世が同心杉浦久藏一説忠た衛門久藏と作る  
深手あひしりし七郎右衛門馬より飛たり是に乗て引ありしと  
よふ久藏よりける馬の下り所ありき如き者ありしころ討まを共  
何事うあらん大將たる人の馬なるもの物うハ八幡の照覧り乗る  
まのしりしを七郎右衛門礼儀の町よりさるごとくしりし久藏これ  
此馬に乗て生大將をまを殺しつりしをせんとて乗まを七郎右衛  
門よりあらし馬をまをよとしひまをくひんとする處より小玉其内一  
石上馳來り七郎右衛門のまをのきとるをとりひて久藏とひきとる馬  
魁角

一打のきやぐく七郎右衛門より走りつぎう七郎右衛門より兵藤弥惣  
 と犬よりいふ小者と三人打つて細道の崖より引退し處より  
 退來る者七郎右衛門をつきあはせ二人ゆつて飛ける所より犬より  
 あけ羽の蝶のき物と持てて投てを敵見てこまをよこんとする  
 所より弥惣走りうりうりうりうんととまを敵弥惣を一刀切りうり  
 うり七郎右衛門とつて敵三人討とうり東照宮剛將の下より  
 弱兵ありと忠世と御賞美ありけり

○

東照宮と武田の兵と大天龍との戦い近藤傳次郎手負て渡邊半  
 藏守綱と見受け手あひするをて退よといふ心得うりて手より提げ  
 首を投てく傳次郎と肩よりけ三里あり引退てをきけは東照  
 宮聞召味方一騎討とま敵千騎の強といふといひ味方とていひ

うり七度の槍を合せたるよりもまきより今より後槍半藏といふと  
 仰あり後より半藏人よりうりてりり傳次郎とてまをれはうりなまけ  
 うり何といひのけあはまきうり時へ大なるなまきる体よりあき  
 殺しを棄らるる味方ありとて頼るるありぬりのよといひあり

又一説永禄五年九月参河の八幡より今川氏真と三河の軍戦あ  
 りり利ありを二手よりつれて引退敵急より追くる半藏守綱石川新  
 九郎返り合せ三度槍と合を後より半藏一人十度より及て小返  
 りとて又三度槍と合を矢田作十郎足より引くを半  
 藏肩よりひきうけて退りてうり槍半藏と人よりをれといひ半藏  
 と半十郎政綱といふ後新五左衛門といふ味方原の軍より草鞋は緒  
 のとけらると下より居て結びけを半藏よりけとも心あづるむらび

て引とまり兄の半藏聞ゆる剛の者も半十郎がとまらぬ者  
者つひの見むと常と語りけり

○天正二年北條氏政三万の兵とりて佐野政綱とて聞き聞て謙  
信八千計の兵とひきゑ後詰せられけり城危しと聞へり謙信後巻  
の口を鎖を政房こゝより高天神落城も及ぶまゝ八年の間牢  
中より甲斐の士横田甚五郎高天神に來て在番せしが大河内が  
節義を深く感ず殊にねんがらふといふなりとて東照宮高天神  
ありとてさけり

○天正二年勝頼高天神の城を囲んと師を出し小笠原與八郎長忠  
軍の目付大河内源三郎政房と相議して防ぎたり東照宮後詰と  
信長よりとてたすみ勝頼城の巽北嶺に陣し大文字の旗を中村の  
内公文とりし所より立る後まゝ其地を大旗と称し兵糧竭士卒疲  
るゝ後巻を待たぬ姉川の戦功を捨てしを怒りて七月二日城を  
出て降参す軍の目付大河内政房へ應政公の妾華陽院の甥あり  
勝頼に降らざるゝ小笠原生より石の牢に入り置き置たり勝頼降  
らば本領を倍しとて行へりといふと説せしむるも志を変せず勝頼怒り  
牢の口を鎖を政房こゝより高天神落城も及ぶまゝ八年の間牢  
中より甲斐の士横田甚五郎高天神に來て在番せしが大河内が  
節義を深く感ず殊にねんがらふといふなりとて東照宮高天神

と攻させたりしひく天正九年三月廿二日の夜城の守將岡部丹後真幸横田甚五郎尹松相木市兵衛昌朝已下切て出岡部へ討死し横田相木へ切ぬけし甲府へ落行けり城落けし石川伯耆守数正城へ入りて政房を捜し出せ牢中一年久しく居りて足疼けしむらこのを多く東照宮の御前へ出せ多年石の牢より艱厄しむらこのを多く御涙を流され御手つらき刀脇差黄金をけりしむらこの政房生とく事と口惜し思へる色あはれし人々敵のとうとある事へ小笠原が不義より武田へ降参せし故多し何方よのうま出づきや志へ比類有まきとある生とうとありぬると多しありまきとありしと口々しひひけり猶も其心は憤りけん剃髪して肖空と称せしが仰より尾張の津嶋比湯へ浴し足の疼も愈へ

けまの遠州神原の地とたたりし長久手の戦い討死し

○

天正三年勝頼奥平九八郎信昌が三州長篠の城を攻めむ東照宮援兵を織田家よりをたきひ後巻の謀をめぐりしむらこの處へ城中糧米既盡んとせし此旨を告奉らん為鳥居強右衛門勝高命し密に城を出せ鳥居の命を出ることを得へ向のうんりしが嶺烟をあはれ三日過て又々の山へ烟と両度あはれ後巻をめぐりしむらこの三度あはれ後巻をめぐりしむらこの約し信昌鈴木金七郎と鳥居より五月十四日の夜城の西なる山の岩根をめぐりし川へ入り寄手素より大野川滝川の水底へ繩を張るる子とくけしむらこの通るきやうありし二人水練の達者も川の浅瀬へよくあはれ小脇差を抽て川底を潜り繩を切て通るるむらこの

さうけんと番の兵どもちやうみけり其中一人五月雨ふらふ川と  
を鱸うなぎの通るふんとしひひけきびさくやみぬ二人ハ早滝はやたきの下廣瀬ひろせといふ  
處より入るやが嶺より烟をあが十五日岡崎より参ておろくの由と  
すところより信長其日岡崎より着陣せし鳥居ハ信昌尚心かたよくや  
らんとのひ得て城より入ることを得ば早後巻はやごまきいづきと審まかしやさんとい  
引くを鈴木ハ信昌が父美作守貞能さだのぶ告げし鳥居より別まきなり  
鳥居くんろが嶺より上り相圖あひつの烟三度あが後篠原といふ所より  
ゆき思ひ入らむやとまらるる柵さく重々より砂をまき出入の人比足  
あを改めし中々入るべき様よくとめしひくつを穴山あなやまの手の  
者見付てちやうして遂いにうらめらきけり勝頼逍遙軒信綱を以て  
子細こまかと問うる鳥居事の由と有のまゝに答へしを勝頼鳥居を呼よ

て汝なりのちをこまかくて汝城際なごに往て信長の上方の軍にて此城  
の後巻思ひゆらるるを城兵降参ふりませしきや汝より厚く賞せん  
といふまじく鳥居則心得いとて城門近く至り後巻とて信長父子  
岡崎まできの旗と出さき先陣ハ一の宮より陣せし徳川殿御父子野田  
まで御馬と出さきこころ此城運うを閑んと掌の内てのうに在といひけれ  
甲州の者ども大に驚き鳥居とひきつまて勝頼よりくとや大に怒  
て城より向く礮はげよくころをまきり長篠より勝頼敗北して後信長  
を始め鳥居が無双の忠あること感へ作手の甘泉寺あまのいづみに懇ねがみ葬くわれ  
けり

○ 勝頼長篠の城を圍攻るこゝ甚るけり信長東照宮と共に  
後巻あり軍評定の時酒井忠次をこゝ出今夜より道より長篠の

附城鴟巢へあつてもや攻破らば勝頼必敗北まゝとや日あけぬ信長  
 よぎ笑ひ汝ハ三河遠江の小せり合ふ慣つても大軍の計策ハあつて  
 りけりとは嘲らるる忠次しき詞きて出ける處ニ信長東照宮ニ  
 けり申す中へきけり左衛門尉ガヤを處尤然るる一又呼出さるる  
 酒井ガ側近く居り誠ニゆきゆき計するうあさきまじい由外ニ泄聞え  
 んくと思て了とてしりてて誹りりきとて馳向て鴟巢と攻ヤぶり  
 ひつとりにまゝ忠次承りて出んとする時又ひきとめ同くハ信長  
 カ向ひ度とともをりあつて武功を汝ニ譲りきとヤさきまじい忠次大ニ  
 りきとて夜半計ニ思ゆとぬ所ニあつて武田兵庫頭信實三枝  
 勘解由和田兵部と始とてあまの討と火をくはる烟を武田の軍  
 兵額大ニ勇氣抽て終ニ敗北のりとあり此夜討ニ天野物心次郎ハ

指物とけり戸田半平ハ道遠ニ夜あくる事もあらんといふ指物を持  
 せけるが城を焼くる火のひかり白日の如く天野戸田先と争ひけり  
 戸田ガ銀の觸髅のさう物うきささるる人の目と驚けり信長後  
 ニ酒井ガ功を賞して汝ハ前ニ眼あまのこも非を後にも眼あつて  
 まゝ忠次忝由ヤてきて終ニ後を見たるこもあつてとヤケれども  
 信長笑て前後の謀たがさる事と賞せんといひ過さうといふまはれ  
 ば忠次其時仰の旨面目ありといふ退出しりけり

○長篠にて信長の先陣と旗本との間ニあり切さるる柵の木やひて欺て  
 敗北まゝ武田の猛兵敵ハいづもといふ追來り柵の木ニ行あつて  
 る處を数千の銃炮雨のふりかざりてあつて空矢も中りける  
 る者数をあつて引退んとする柵より出て付けあつて戦といふ



柵の中に入りてうちあつて勝頼の士大将勇氣あまり有とりども打破  
るべき様多く皆的より討死したり

○ 同ト時徳川家の先陣と下知せしめて信長の使來る内藤四郎左衛門  
つとま主君ハ先陣の下知と他人よりくる者よりひつて内藤承て返  
答仕りしとやせりしとあつて追うる信長きつて徳川家よ  
き士教とあつてしりし

内藤と鳥井は作さるあり然れども鳥井ハ三形ヶ原より討死しこれ  
ハ内藤のしりしあり

○ 同ト軍ハ甲斐の士一人生どりて信長の前よりひき來る裸ハ緋曇子の  
あつて帯とあつて信長名を問うる美濃の者多田久藏と名乗る信  
長手と拍て汝ハ伯父の葬禮の時火車と斬らうときけり美濃尾張ハ

つとまあつて有國あり我ハ奉公せりとや思ふ縛りたる繩とやせ思  
源太もうらめしきあり弓矢とる身の恥あるとしりしとけり長谷川藤  
五郎うらめしきひきのけ繩をとけり多田久藏の槍を奪とり四五人つき  
伏る長谷川をこりて首を切りて信長より出りあつてありとりて信長  
深く惜まきけり

一説赤地の唐とうの錦比下帯あつて士を生どり來る唯者あり  
ど名のまじりしども名のまじりし雑人の手よりけり殺さん士  
らむ腹切せんとしりしと多田淡路が子ありしと信長聞て淡路  
久藏新藏とて二人の子ありときりしと問うる新藏ありと  
やも勇士ありとけりて有けり生ると成る恥辱とて首  
を刎らるべしと乞うる信長比前より繩をときり門外より立ちけ

る槍をく、何々の者をつき殺まよつて遂に新藏を切ころし  
けり

○長篠合戦の前信長謀とめど、佐久間信盛より潜し長坂釣閑がも  
とて使を遣り、日比信長に恨る子細なり願つて勝頼軍とせよめ戦  
あらん、其時信盛裏切して信長の旗本へ俄に切らふき旨をりひ  
送りし、釣閑悦でこきとらぶる、あまき勝頼一戦をせよめひ  
故馬場美濃守信勝と始とて侍大将の軍評定してしひひらきとを  
勝頼悉く用ひし、楯あしを誓て進て軍まきと決断せられし、  
其後の諸大将諫ととと得ざりし、けり

○天正三年六月東照宮二股の城を攻た、城主へ依田下野守幸成  
より其子右衛門大夫幸致城を出て鳥羽山の下なる小川を隔て防

と、内藤弥次右衛門家長強弓の手きき、散々射あし、松  
平弥右衛門忠長が子彦九郎敵に朱のころちんのさ、物ころを見て味  
方より此き物有けま、あまきて敵の中へまきし、朝比奈  
弥兵衛一箭より射伏し、内藤彦九郎と縁者のあし、有べ引返  
し、弥兵衛を射る其箭弥兵衛が乗る馬の鞍の前輪より、輪を  
うげく射貫く弥兵衛が弟弥藏を來りて兄り屍とひき退んとせ  
と二の矢より是も射倒し、城兵二入れ屍をひきのゆんとせ  
本多忠勝等も、追て追て城兵引退く中、一人手負てひ  
きめ、此あし、一人と返し、是を門内へ引入ゆ  
ろと櫻井莊之介勝次敵の首と取、又まきんで追うけ行き東  
照宮御覽せ、苗の四半のさ、物櫻井あ、深入を仰せ

りきけり其時敵の手負を助くる者やうく一の木戸揚錠門の中へ  
入り手負たる者へしき半見ゆる處に勝次走りつき手負たる者の足  
をくつて三間計ひき出し遂に其首をとる其時門内より勝次がさ  
し物と打折くが屍よりくつとをさしきく五六間をく引と  
る時従者くくしくも又取て返しき物とく得て鳥羽山へ帰り首  
を奉る東照宮唯今の勇氣のしりめさ誠は無双と覺ゆるる然  
まども是より後へやめく今日のどく深きまきくくをくく遠州  
より禄を増しきくけり彼従者も度々くくき有て後士とる  
内田彦右衛門としひけり

○ 勝頼長篠敗北の後蘆田常陸介信蕃二股の城を守る三河の軍五  
月下句より此を攻る南方山へ東照宮御陣をまくりを異の方鳥羽

山東の安倉口の山北の三十原口の山西の和田島へ向城とくく  
らる信蕃固く守り十一月に至りて城をくく甲州へ引入くくと  
勝頼再三下知せしめれとも聞入る勝頼自筆の書とくく下知せしめ  
しく十二月下旬より入質を出し三日に城と渡さんと約  
ふりけきく籠笠より見苦しくくく翌廿四日天晴て  
二股の川北邊より入質とくく引とく信  
り且城をくく作法正しきけりと御感  
仕へけり

○ 天正三年信長美濃岩村の城を攻て秋山  
ら逆より付し物とせしきく此の  
より遠山の其前岩村に在けりを秋山

○ 和平わへいしつとくしつとく元龜二年信長の加勢かぜいの士二十五騎  
城と奪うばりて内藏助うちざんすけが後室ごしむと已やが妻つまと一いつけり遠山とんざんは是より前まへに病びやう  
死しし其嗣そのし信長の男御坊おとぎ丸まると甲州かうしゅうへ送りやう岩村いわむらと居城きやうじやうとせし  
信長のぶなが怒いかりよよくく事こと深ふかくくせしまり秋山あきやま口くちよりくちもも  
られたるる事こと無む念ねんふ  
りりとと齒はとと信長のぶなが比末ひまへと見みよよと罵ののしりて七八日しちやうぱちじつより有ありて死しし  
信長のぶなが信州しんしゅう法華寺ほっけじより兵糧ひやうりやうつつりてり時ときりりくくの小袖こさそでと着きる女房にようぼう  
一人ひとり來きり懷いだり錦にしんの袋ふくろより入いる茶入ちやいれととり出でし是こゝに信長のぶなが見み  
せしまりりへ見みちちりりあありまさんさんといいふ信長のぶなが走はり出でて茶入ちやいれを石いしに  
當あてりち碎くだき刀やいばと抽ひてりりの女房にようぼうと切きりりささりり此秋山こゝあきやまが妻つまと信  
長のぶながののととあり

○ 天正三年八月東照宮諏訪原の城を攻めさせたまふ此城ハ甲州馬場  
美濃守信房みののしんぼうが城制じやうせいの法ほうよりりききりり名高き城なたかきじやうなりといいふも城  
兵力きやうりき弱よわりて廿四日の夜城を棄すて小山の城こゝみやまのじやうに逃落にげおちり東照宮此  
地ちハ高天神たかてんじんに往來かうらいの要路やうろ駿州田中持船しんしゅうでんぢうぢいぶねの敵たか大井川一筋おおいがわいちぢいんと隔へ  
りて勝頼かつら必隙かならずあひらと窺うかがひひ誰たれも此こゝに在ありて城を守り敵を防ぐべきと  
仰おほせありけり松井左近忠次まついささねただつぐも出身いしん不肖ふしやうゆゆにも此城を守り  
やぶらりりと申まをけり御感ごかん有ありて松平の姓なづなを賜たまひ御諱ごごんの字なづなを下くだささりて松平  
周防守康親しゅうぼうしやうぢいとやせりり此時こゝよりりのりことり勝頼かつらが暴悪ぼうあく殿だんの討うち  
似にたりり攻せりて打うちりてり諏訪の原比城すわのはらひじやうと牧野比  
城かしのひじやうと改かへりり攻せりてり  
諏訪の原比城と甲州より攻來りて合戦あり松平康重まつひらぢやうぢいの  
子こ

士山内治大夫進士清三郎山崎惣左衛門三人殿へける山内へ精兵の手きく射拂て引退く時矢どぬつて山縣源四郎猶追くる時進士清三郎矢一筋を山内よりあがりて山内より止まりて射ける志村金右衛門が胸板と射通後松の木に射つけるとまきり物つらき山縣此矢を康重に送りて強弓精兵無双ありとどるりける康重其矢を進士が姓名に彫付たりと見く賞さる処は是を山内が射申さるるひとやを復山内を呼出してさうらやと聞さる清三郎が射さるるひとやづりける康重兩人の感状をゆさる世の人兩人を今の孟之反といひあへり

○天正五年畠山修理大夫義隆毒殺せし家臣七尾の城を據く信長に属し能登大に乱まけし義隆の伯父上杉弥五郎義春越

後、在て是を聞謙信より告謙信即師を出し義春先陣く七尾の城を攻落す此時長九郎左衛門重連七尾より畠山へ長臣温井三宅を殺さる重連の弟恩光寺使僧とあり信長は此由をうき柴田勝家丹羽長秀長谷川某前田利家羽柴秀吉滝川一益比家ト全等四万をうき打立八月五日加洲手より川を渉り永高に陣取らる謙信は能登一洲悉く旗下より八月朔日兵をうき加洲にて長ヶ一族の首七つ倉部柏野の間なる濱に竿を渡し並べ札を書て立られし松任の城主蕪木右衛門大夫と和平し信長着陣を聞松任より軍評定一戦まると手くあり七尾既く落て謙信は打向さる爰に合戦無益ありと引退くと信長の陣は立恩光寺人の首を見まると名のうき面貌異あり上方の軍

のや一來るとき謀を以て長一族の首をとりて設るる能州を  
まて松任に在の後詰を防んらるるをいと聞てきやもよる  
りけり即夜成の刻し及て恩光寺紫田木下ヶ陣へ行先ら味方一同  
一敗北まきりうあらと見てとらうてゆらうらう七つの首の吾父兄  
弟ふいと告あうせうら爰う合戦まらうとて信長引くさる  
恩光寺是非一軍と乞うとも聞入る恩光寺の後信長の命うく還俗  
一長九郎左衛門連龍とりり一人あり連龍父兄の吊合戦を志  
一信長の下知と請越前に至りて柴田うのりけり勝家越前の大  
橋一札を立長九郎左衛門能州に發向を立身と志を輩へつて被  
官うとも参るると書うけら相あつする士八十餘人天正七  
年三月二日能州穴水の城に入齋好の者とも馳あつする百人に及べ

り上杉より有坂備中と七尾よあきけり長曾檢見與十郎を大將  
とてあうを戦ふ長敗北して危ううを谷大學討死し長や  
中く引きとらう紀州士鈴木因幡初長もあうあり北越に居て今  
能州に來り長有坂と和平に従者陸長の船より有坂の方を來  
るるとの使は鈴木來りし長と殺害するきりうあり長に従うる  
石黒大膳井久留了意合田民部木嶋小介如何まきといふ石黒今  
七尾よゆら必害うららん船中より鈴木を殺し退くといふむ  
長聞て汝ヶ志悦ふ然とも陸より回る家人皆殺さるるん  
獨生へき義ありとて七尾よゆき法道寺に入て遂に有坂と對面を  
殺害するめこれども有坂事故多く長を帰しけり松川兵部今  
日長と討りし残多くありしを討んとしける有坂聞入る長

ハ石動山より越中へ赴く石黒敵を來らん殘る者も口惜  
きなり姓名をさしりり敵を支て討死せんといふも長汝とま  
殺し吾獨生て何の面目あるんといふ石黒いひひあき事と  
ゆゑの本意と遂にれぬ吾子孫とてつてまきつるしつ處  
尾の商來りて敵ねよまるとりつ長石動山より石黒の物  
て待ども敵來らさまびつとて乗付て共越中へ赴き神保安藝  
守氏春のりつ居り後長へ前田の家仕て浅井あつて武功あ  
りつ此入り長後又怨庵と稱しつ

○謙信越中より秋夜諸將をあつる月を賞して詩なり

霜滿軍營秋氣清  
數行過雁月三更  
越山併得能州景  
遮莫家鄉說遠征

○東照宮信長と御對面の時松永彈正久秀よりつて信長此老翁

ハ世人のあつて事三つある者あり將軍を弒し奉り又已が  
主君の三好と殺し南都の大佛殿を焚く松永とやまき者ありと  
申されし松永汗をあつて赤面せり

其附録  
の主意  
とせん

東照宮後長臣等を召て御物語有ける時此事を仰出され先  
年信長金崎を引退し時所々一揆起り危うし朽木ら浅  
井と一味をうけひ進退きつるし松永信長つて朽木が  
方へ参りて味方引付ひ朽木同心せむ人志をとりて打  
具し御迎へ参る若又歸りまはる事なほ朽木と  
刺ちぐく死しつてあつめされといひ朽木が館へ赴き  
こころ人志を出させをまかり信長朽木谷より引く

きまゝと仰らまうと終

松永が士大将山口六郎四郎奥田三河守高屋の城を守りけり信  
長攻りて城の中力盡て一方を破り落とせし山口風雨の夜  
銃炮をあつめ東の門北寄手へ向て散々うせけまらや打て  
出るとさきぎけるそのひまゝ西の門を開き一同よめ出撃破りて  
をちゆきけり

○

謙信

天正六年三月九日

養子上杉三郎景虎

改政虎實の北條氏康の子猶子喜平

治景勝遺跡と争ふ景虎縁あり武田勝頼は援兵を頼む勝頼  
兵を出さ此時景勝謀て勝頼の寵臣長坂釣閑跡部大炊助は使者  
を送り勝頼は黄金一万両寵臣は二千両づと與へて加勢を乞ふ兩  
寵臣勝頼を勸て政虎と放さまて是より諸士勝頼をうけける

が終り勝頼の妹婿木曾左馬頭義昌信長に從て勝頼は叛く勝頼に  
まを討んとて軍を信州諏訪原に陣を小山田左兵衛信茂も  
從て御宿監物友綱に贈る

金五百鈞

砂金と一朱りともぬき薄恥をくく數入るる那

友綱次韻

甲越和親堅約辰黄金、媒妁訟神恨倍臣屠盡平安國可惜家  
名換万鈞

薄恥をくくめりめりもくく世の寂滅まらも金の諸行よ

兩寵臣弥邪義を行て武田家滅亡せり



○天正七年九月東照宮勝頼と大井川の伊呂川と隔て對陣し  
 あつしきを時大木川上りて川をまさび落ける其音波よひきて  
 さらさら聞へるや勝頼夜討し寄るるとさるるさるるやとま  
 りを牧野半右衛門先陣とあつめると仰せしむる牧野馳行て何  
 りとさるるや御旗本もさるるさるるやとあつめると呼りけむ愈  
 りとさるるやけりくる處大久保七郎右衛門忠世馳來り勝頼おし  
 まるるやと御旗本の物の具くる敵を待ちける何と先陣此  
 人々くるまを驚きさるるや後日嘲りさるるやとさるるやとあつめると  
 と罵りけむ是恥あらむとあつめるとさるるやとあつめるとけり  
 一説持船の城を攻めんとせむ保がくると焚まらる此時勝頼  
 沼津の城普請築土の上りて此烟を見らるるが北條家の軍と

後九月廿日東照宮の御陣し打向ひ富士川を打て東照  
 宮客戦の危しとや御思慮有けん兵をさるる大井川の伊呂川と  
 さるるやとあつめると定させたまひて俄に惣軍さるるやとあつ  
 まるるや牧野半右衛門制し止むるも跡さるるやと七郎右衛門  
 忠世御旗本の大挑燈を高くさるるやあつめると士とつけあつてさ  
 歸るまて動くさるるやとさるるやと先陣し行て御旗本ハ二の身  
 を討んとさるるやと其證は火の火比動くぬを見よとさるるや  
 是よりさるるやとさるるやとさるるやとさるるやとさるるやと  
 敵を待休る以後先陣の人々さるるやとさるるやとさるるやと  
 さるるやとさるるやとさるるやとさるるやとさるるやとさるるやと

○東照宮高天神の城をさるるやとさるるやとさるるやとさるるやと  
 柵を付て固く守るる城

中後詰と乞ふも勝頼出で糧盡けり粟田刑部使をり幸若か  
舞と一曲所望し是と今生の思ひ出せんとやけつと東照宮聞  
召すゆゝもしひるよと幸若高館を舞せり粟田か最愛の  
小姓時田鶴千世としひる者結紙中物の物せし出しく幸若  
と贈りあふ其後落城の時時田討死しけつと首ととりしは  
女の首あるごとく人々疑り東照宮聞し召し眼とひき見よ女  
あつを白眼あつと仰有りけまひひて見よ黒眼あり又幸  
若忠四郎も高館を舞けるとき見ありしうけまひ時田か首と定り  
けり

○ 天正八年七月東照宮田中の城を攻むをたすひ八幡山に御陣あり  
て蒞田むくきあり勝頼後巻せんとき甲州を打出る松平康親か

士岡田竹右衛門元次此ごろ夕立洪水有べきときより大井川へ下  
夜に水出て涉りけり勝頼血氣の勇将をけりし俄に押を  
ひ事ゆゑん蒞田終らばとく川と涉て兵をくさき然るごとく  
東照宮尤ありとて川と涉り兵をとまめなま果しく其夜大雨が  
〜大井川水出〜

○ 田中の城を攻らる時西郷伊豫とし剛の者足輕を引具し度々  
打て出寄手をやぶりけり東照宮誰うら西郷とらるべき者  
仰ありけりも答奉る人あり其夜菅沼大膳を陣に人々あつ  
て此事をしひ出〜菅沼か小性朝日千介後よ丹十八歳あり  
〜かきみ出討とらる〜とら菅沼聞て汝寢言をしつやとしひ  
必定討取申さんとしつゆゆりの古兵も軍あつねる西郷とら

やましく討んと思ひもよらばそと立されと罵りけきまうそよりや  
 とよ千介がつらまきしひあしくなれぬ末頼母しきつら者ありといひ  
 ろだめけり千介あをを待まよ西郷が首提て参らん物と獨言し  
 て退きけりうく夜深く菅沼が愛せし鑊炮ととり出し曉陣屋を  
 ひそく出岡部と藤枝の間ある竹林より居たり夜あけて西郷  
 馬に乗足輕引具しく来る東照宮の岡部のくえ比小山に陣し  
 とつぎ敵又出ると仰有ける處に千介鑊炮ととりまへ西郷と  
 馬より打落し走り出て首ととりけり帰りてうくとや東照宮何の  
 ま剛の者よとちめきをたまふ是より千介が名高く聞へけり  
 ○天正二年勝頼兵と出しく菅沼新八郎定盈が新よりまへる城を攻  
 んとま定盈の一族と郷導としく不意にあしうまる謀とありける者

ありく北口あはせり月廿九日の曙に定盈が士ども大敵和田山嶺本  
 宮坂二筋よりきて攻來し間とく退まよといつを聞て一軍もせし  
 逃落ん事弓箭する身の恥ありといふ人々永禄年中今川家より攻  
 時の西郷孫九郎元正加勢より今多うぬ士卒打ちうさるる早く  
 城を出て運をひく道の道を然るるんとしども定盈兵を出し  
 敵の様を見せし山縣が軍競來る由つげり定盈則ちまきう  
 手を洗り又湯をゆき口もまきする体常のこころあひて諫まを  
 南の郭より退きけり途中にて等が伏野に火をうけざるこ  
 後敵に嘲らる誰かの帰りに城に火をうけ又日比愛しける鷹  
 と携へきたるしひもけり中山與六十八歳より引く

城より火をうけ鷹を臂より出さしけり定盈の宇利を経て西郷へ赴ける所をあらはれり與六海倉淵まで退きしに與六が一族後藤金助追うけ来てきてあつても敵と見ゆるよと詞をうけしに  
 〳〵與六馬ひきうへむむと組て既ニ金助が首をとんとせしに多嶺の士あまもむらうきさうて終ニ討まけり山口の定盈が後殿にて主従三騎素胸瀨を渉るゝところ敵追來山口引くゝて敵ひまき射伏さざども馬疲まければ敵の近く鉄田村より吉祥山へ赴く敵猶追うけ來まむ散々射あつりけり馬動ざりける故乗るものて歩どちより山より二筋は残り菅沼刑部塩津傳助追つめけむ射さざども中らむ指添を抽て手裏劍より刑部が頭上よりうちうちより山口も終ニ討死し其墓しき

三郎の東照宮の子

岡崎三郎君天正七年二股の城より自殺ありしけり信長より叛逆の志有て勝頼の内通し二股の城へ甲斐の兵を引入せしとの三郎謀り此事の酒井左衛門尉より存知と告アされしより起りてつひに死を賜ふ  
 忠次と信長召寄て三郎君の北の方より告アされし十二條の悪事をあびく忠次に問まし忠次是より前三郎君の侍女ありしひり美人とひきり己が妾とせしことより三郎君憤深かりけむ陳謝の事に及びし  
 又一説より佐久間右衛門尉信盛三河に参りけり東照宮御馳走ありけり三郎君をめぐり御對面有し佐久間黄なる綿が

しとぞ居らるる三郎君ひき奪ひてまが棄無礼とて怒らるる  
たゞ東照宮驚思召けり三郎君は信長の婿とて何と  
と仰らまはる佐久間無礼と謝しやせしが是由信長は讒言せ  
し故とのりて三郎君の勇氣をまじくきつめて物あはれ  
まじく軍に臨て氣色うり髪毛も逆らうて見しと東照宮  
御覽に々摩利志天の像に似たり仰有しとぞ

平岩七之助親吉は三郎君の傳より臣に諫申さる罪を以て  
死刑の行も首を信長にあはれ三郎君は獄にありて時を御待  
あまて申けり東照宮汝が忠心の誠よりいふに詞も非ざるも察  
せし武勇のまじき思ふ子を殺さる忍ぶるの至き汝が首を  
信長にわくらるも既に吾家の長臣酒井が信長にあはれ

りひつゝ覺えまはるり聞入らるる汝を殺さる恥の上比恥損の上の  
損とて是ふるゝと仰らまはるる其後年経て忠次目と煩ひく久  
しく引らるる御前より出て年老ひぬ子と不便にせざるをた  
まへとアけり聞召信康生て有るる心と労たまはるる  
汝も子の不便あるるをありて怪しきと仰らまはるる言ふを退  
出まはるるあり又ある時幸若太夫が満仲と舞うるを御きまはる  
満仲の舞は大久保に得見まはるる仰らまはるる忠世も引こりて  
まへ三郎君を忠世に御あがけ有しと定て引具しまはるる片々  
げの山林に身をひとめあんと思召しけりまはるる故三郎君  
の御事を悔まはるる御詞より出まはるる事より數年の  
後愁傷の色あはるるまはるる

○攝州花隈の城ハ荒木越津守村重ハ一族荒木志摩守元清ハもれり天正八年信長の命ハ付城ハとく人花隈の北諏訪ハ嶺ハ護國公西ハの方金剛寺山ハの士大將伊木清兵衛忠次森寺清右衛門忠勝南ハの方生田の森ハの護國公の嫡子勝九郎之助守りたまひぬりつとも花隈より六七町計を隔り三月二日城より兵と出き勝九郎廿二歳より組討の功名あり國清公此時古新と申尉輝十六歳よりおのせは是も組打より首をとるたも護國公敵五六人自討ちより伊木清兵衛秋田嘉兵衛堀左衛門若賀五郎右衛門石黒武右門佐橋武右衛門後藤市兵衛波多野弥藏等もげく戦ひて追崩れある夜護國公森寺政右衛門を呼り城中へ忍入り見來れ命ぜり森寺行く時梶浦勘兵衛由打つとんと森寺今夜の

物見ハ大事なり相俱んこと叶はるる梶浦聞て思ひ立ち空しく帰るべきや自害するより外ありと中々帰るべき体よりさきばうちつと陣と城との間ハ小坂あり城中より武者二人槍を提げ來り出あひ二人とも計り首と草の中ハ匿し搦手の水道より忍び入又水道より出て匿し置る首と持歸實檢入と城中の有さしと護國公ハ城ハ攻りてちまるといふに承りて政右衛門ハ仰りて物をけりてきりて護國公近習の人とのけりていひつること立聞し且軍法を破りて怒りたまふ其時森寺只今忝き仰と承りて賞美の望ひの勘兵衛ハ咎とゆうせたまひいへがとせハ護國公さくやあんを仰

ゆるくく七月二日、及ぐ生田の森比南へ馬の草薙、雑人出け  
るを城中より兵を伏置て追ち、けつと生田の森比付城より是  
を見て勝九郎馬上に槍と横とへつけ者どもと馳向ふ梶浦兵  
七河崎忠三郎大陽寺左平次臼田喜平次日置清十郎など追つき  
声と何ひて切くる竹村喜左衛門乾平右衛門長谷川新次郎槍  
つきを射る淵本弥兵衛の四寸角の柱の一丈餘りあるを打り、敵と  
たき伏せ相戦入金剛寺山の伊木森寺も大手の軍をけしきと見  
て搦手より乗とんとあしきる城より野口與一兵衛といへる者  
半町を打て出防けり、埜口も討死まじ、城ぎりあしつひ  
大手の戦、寄手多く討せ危うけ、引くさんと護國公梶浦  
詞とりけり、勘兵衛唯今あらんとせむ、弥とれ何しある

へ救來りぬん政右衛門早もめ手へあしつり乗らむ、然る  
に只今大手の味方と引くべ敵搦手へまかりて政右衛門討死ま  
し、護國公尤もゆきて見來ま、仰られし、勘兵衛馳  
ついであしつり、政右衛門と、ひひま、早來入る  
大手を攻らむ、と、勘兵衛此場を見ま、歸らん、口を  
け、使の仰重け、歸り、護國公無二無  
三、乗破ま、下知せ、勘兵衛へ城兵の必突、出べき門、脇、つり  
よ、搦手より、伊木森寺先、門を破りて攻入り、森寺  
の春案内、見、故門を破る、透間、の屏を踰  
敵槍、突け、飛、其ま計、梶浦、察せ、如

くうめく防ぐ兵少るうけまば攻入て火をうけり城兵も大  
 手の門をわひひき切て出る勘兵衛待請て槍と合を城兵爰と  
 切ぬけん死狂に成て戦ひけり寄手うめり攻入りて敵の後  
 へ切てうりし城兵濱邊をけり敗北せり兵庫の築嶋一雜賀孫  
 一郎花隈の加勢とてあつげを伊木森寺先陣よけおしを攻落  
 此時湊川より勝九郎五輪作右衛門とて剛の者と槍を合は森  
 寺政右衛門も馳付てまゝ作右衛門引返り退きけり五輪のさ  
 物と是はうきまきは物より兩人へまめりてうりひて川へ飛  
 こみて逃れ得り黒丸四半と白丸五輪の形と染たるありと  
 う信長より勝九郎國清公一馬とまめりてらる護國公今度の軍  
 こそ目前より各功名しるあり明に見届ぬ中一就て梶浦り決

断槍と合はせしるうの忙しき場よりこそ察しられしうり賞  
 美ありけりごと

○

天正十年勝頼の弟仁科五郎信盛高遠の城を守り織田信忠僧と  
 使しして勝頼の滅んこと近きより城をさらしつゝ送  
 りしうけまば信盛怒て返答もせぬ僧の耳鼻をそのを追出させ  
 忠ゆへ攻よとてあしをてまびり攻り城兵残りむくあて討ま  
 信盛小山田備中渡邊金太夫照春日河内守原隼人今福安左工門  
 諏訪莊右衛門已下十八人十二間七間の廣間より火をちりし  
 戦ふ信忠浅黄金欄のありりて屏あがり梧桐の枝よりつぎ  
 下知せしるを目より七八度打てり此時三十五六歳なりし  
 女房の緋あざりの物比具着眉尖刀と提げ諏訪莊右衛門の妻あり



とあるの七八人あが伏て自害し信盛を始として死狂に切てま  
 せ攻あぐみする時森武藏守長可屋根の板引破らて銃炮を打  
 こみうけしを信盛床の上より腹切て腸をつんでう紙を擲  
 ち倒れ死を其血痕後まを有とりり小山田已下も自害し信  
 盛此時十九歳あり信忠のとうつるま梧桐に槍刀の何とひくと付  
 て大廣間の天井の柱も槍太刀の何とありて血をまきね所あり庭  
 に残る雪に血をりりて紫とありしとぞ

常山紀談

五六

東 京 圖 書 館

和書門

雜史類

三五函

五二架

二六一號

一五冊

常山紀談卷之五目次

- 一 勝頼の首穿鑿の事
- 一 秀吉勝頼の滅亡を惜まざりし事
- 一 信玄の館跡と信長公見おまひの事
- 一 勝頼天目山よて最後の事
- 一 禪僧廣嚴院勝頼の屍を葬る事
- 一 信忠惠林寺を焼く事
- 一 東照宮依田信蕃を助けし事
- 一 武田信繩誅戮の事
- 一 戸田半右衛門山口小辨佐々清藏功名の事
- 一 小山田信茂誅戮の事

一 馬場美濃が女召出さる事

一 辻彌兵衛が事

一 明智光秀信長公を弑する事

一 秀吉備中へ光秀が書を取り事

一 秀吉西國の米を買事

一 光秀居城を築く事 附 辛崎の松の事

一 森蘭丸才敏の事

一 光秀反状の事

一 秀吉浮田を欺きて上洛の事

一 黒田孝高思慮の事

一 池田家の使者筒井順慶を試す事

一 明智光春湖水を渡して坂本城へ入る事

一 東照宮和泉國塚よて御帰國の事

一 小寺黒田始末の事

一 井口兄弟武勇の事

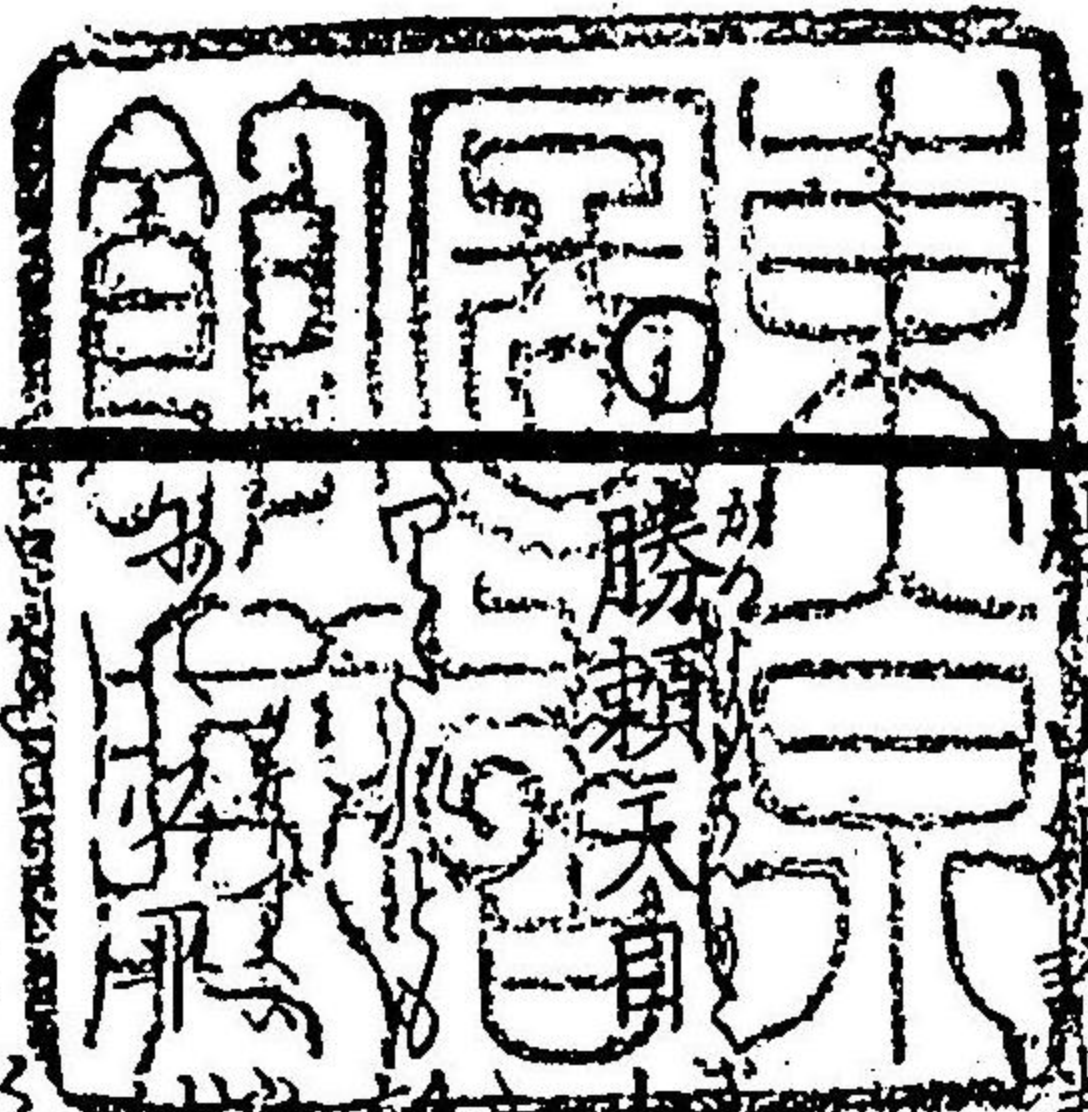
一 吉田六之助首供養の事

一 生田木屋之介武功の事

一 備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺して討死の事

一 再福岡合戦薬師寺額田片岡三士討死の事

常山紀談卷之五



備前國 湯浅新兵衛元禎輯

勝頼天目山山より落行時瀧川一益攻入て落人ども討とる勝頼の首をもと  
 誰とひふととあるべ小溝の中ニ棄けりる百姓をり溝の前  
 礼とて打通りつゝある故ぞ問ハあつ溝れ中ニ  
 屋形の御首れおら候とひふととて首ともとて出す信忠勝  
 頼の首ともとら置先瀧川義太夫を呼て汝とらとら首ハつづらぞ  
 とらとらとは是なりとて出ま此ハ土屋総藏昌惟が首なり伊東伊  
 右衛門といふ者もみ出て勝頼の首をもととらとら伊右衛門とら  
 といひて申入證ハいふとらとらとら斬口ニ乗る馬の栗毛かひ毛の血  
 さらさらとつとて候天目山の麓田野より鞍の四方出よつと故な

アト申を果し、詞まじりて伊東がとうらるゝ定まりぬ信長勝  
頼の首と見てつゝ、汝が父非義不道あり、故天の譴め、今  
かくならぬ信玄一度京に赴くと志し、聞く汝が首を京に  
くろく女童に見せ、いと罵り首を東照宮の御り、つら  
東照宮御将机あり、勝頼の首と聞し召將机をとり、  
はひ偏つゝ、故思慮なく、あを候と礼義正しく仰あり、是  
を傳へ、甲斐信濃の士ども徳川家よ心をせ奉り、  
又一説、勝頼の首を瀧川ヶ士瀧川莊左衛門と、使番より、  
て信長よ見せ申せ、罵り杖を二つとて後足、  
蹴らけ、莊左衛門是を見て、かゝることを、織田家の運命  
をやつゝ、蜂須賀阿波守至鎮の長臣、橋田修理

弟丹波瀧川ヶ方、信長より置き、聞か果し、程あり、信長弑  
つゝ、莊左衛門心ある者、蜂須賀の家を捜求、  
瀧川の家滅て後、れを召出し、仕へ、

○ 信長甲州に攻入り、比秀吉の筑前守とて西國毛利家に向て甲  
州の軍を従せ、勝頼死して甲州平均、秀吉大息つ  
てあつゝ、人殺し、残る多し、我軍中、あつゝ、  
申て勝頼、甲信二州を、關東の先陣、東國へ平  
して、悔

○ 勝頼亡て後、信長信玄の館とて馬を乗入、馬進  
び、引返、東照宮へ程、甲州を治め、時  
信玄の館の跡御覽の時、館の門外、御馬より下させ、

○ 勝頼滅亡天目山とのいふも 甲陽軍鑑へ切死に没せりといへ  
せり甲州の士民のいひ傳ふる異なり 鶴瀬も勝頼の背に天目  
山とて落ゆり一揆所々より起りて百姓の家を従ひ  
一婦人どもをりた旁に人家の茅のあつたをりて出入る口を  
あせがせ火をさけられ多く小高き所より上りて武田の家代々持傳へ  
らるる一楯無といふ物の具を信勝の著せりける土屋総藏肩入れ  
役とて勝頼薙刀を横へて一揆の向りけり総藏屋形  
も新羅三郎より二十八代弓箭の家とてせりひ今のいふ及む  
せりといふも一揆むりて御首とて申さんといふ口惜く候と諫る  
む尤もといふ物の具めを総藏の舛錯せりて終らけりとも相従へ  
る人々皆互に刺しあへて勝頼の供へりて総藏と僧の隣舟と残りて

とていふが皆事とて終りて後総藏自害しりて隣舟  
刀を口より貫りて死にけりといふも後甲陽軍鑑天目山の  
こといふより彈正の筆記に非ず後の人誤り傳へてかきとるる  
べし

○ 勝頼父子の屍田野にあり信長を恐りて惠林寺の僧を始りて  
斂る人なり田野の西北四里計に中山といふ所の洞家の禪僧廣嚴院  
来りて勝頼夫婦信勝已下の屍をあらしめ葬り其後東照宮甲州を  
御あさり一寺を建立ありて景德院と号し田地を寄附あり小宮山  
内膳友信が弟僧なりて住持に僧とていふる

○ 勝頼亡て後武田家尊崇し惠林寺に前將軍義昭公の使大和淡  
路守三井寺の上福院佐々木兼禎三人かく置る聞えありけり

早く出まへしと信忠下知せりて三度及ぶも出さば信忠怒  
て累世の檀越勝頼も少の間も境内よとて其遺骨を  
斂むて詮なき者をかへりて津田次郎信治長谷川與次郎  
等とて寺を焼くも其下は焼草を積て火をくわひて快川  
の樓よの何れに焼くも其下は焼草を積て火をくわひて快川  
を始とて坐して合掌して焚死す其餘かりきりて焼死す  
者寶泉寺の雪峯東光寺の藍田長禪寺に高山等兒童に至る八十  
四人あり

又禪僧の語て傳へし快川濃州に在り時信長招待せり  
肯ず今川の家に行て甚今川家を輔佐せり信長とて  
甲州に往て惠林寺に住持あり信玄の死を深くかへり

信長いり怒てまゝに快川のてりて泄す信  
長怒よとてひらりて武田の亡一故遂に焚殺されり又其時上  
下は槍先をそろてあまきとて快川弟子の南華を法  
れ絶せんともて逃るるも樓より飛て死候へ  
とていふ南華飛りて群る士卒の槍をよとて作  
る者も槍をよとていふ南華たもて得て後豊後月  
溪寺よありとて又つりて飛る者十六人ありとて其名傳  
る

○天正十年三月東照宮江尻に御軍を出る成瀬吉右衛門正一を  
以て田中城を守らる依田右衛門佐信蕃に降参りて武田  
の舊臣悉背て滅亡近き城を出候へと仰せり



田從ひ奉らば武田の長臣共の書簡を得て虚實を定むる旨を申  
も其後先年遠州二股の城にてゆづり候へど大久保忠世の城を渡  
るに申すに東照宮尤きりして穴山梅雪が書簡を送るに信  
蕃は於て城を忠世に渡りて降参其信州の本領をめて行り  
べき由仰出され依田兼光勝頼の存亡を審み兼らざる間ハ仰  
を兼らざるに申て信州佐久郡葦田に赴きたり勝頼既亡て  
信長今度勝頼より二心かたき輩といふも武名ある者ハ諸將召か  
つゝ下知し猶これ居る者を搜し出して死罪を行くものなり  
東照宮此事をのたまふに信蕃を市川の御陣より召密旨に  
蒙り主従六人遠州飼東郡二股の奥小川とふ所にかゝるにひけり  
其餘仁徳より人あやむけり

○

天正十年三月武田道遠軒信濃降参し信忠森武藏守長可  
下知してより長可各務兵庫元正を使し武前米女をそ  
らり信綱刀を膝下に置て各務武前行向て武藏守り後父を  
る馬の候かきみ見たりんやとて庭より出る處を元正二尺六  
寸ありける雲次の刀を一太刀斬りしに信綱小脇指を抽く處  
を米女ついで切伏し小姓河野とよ者信綱の刀を持居り  
しが即抽て米女を切了兩士遂に河野をも討ち元正槍を  
合せ首をとりて世に高遠の城攻もさし見て群  
る真中へ飛入倒き起あがりて散々切あひ首をとりて鶏  
の尾の棒の物にてひらきあつても信忠見て誰と問  
長可より家の士各務兵庫と申りのなりとて誠今日の見物

高遠の城より戸田半右衛門重政一番より入る時赤らるる金の庚

竹の出利戸張隠のす戸衛木も當て通て得る尻居も倒る其間

信忠の小性山口小辨佐々清藏も越て入り戸田後人よ詰めて

物より敵もてかゝ時外の志へかゝれり勝れる武勇の人

の別のことよりひらう半右衛門後武藏守と称し関原にて討死す

信長後よ感状をあへり時先小辨も手づる國久の刀をあへり次

よ佐々よ長光の脇指をあへり汝が武功ハ誠よ大功の内藏助も従子あ

まが詞をかゝる二條にて明智信忠を攻る時清藏小辨は向ひ

て死んハ屍の上れ恥すて打て出一人づ敵を斬伏其

屍を引入る物ハ具とて打着又切て出討死せりと共十六

歳容貌世よ超て美しき面よ血を濺ぎ髪の乱きとるひ

殊よ惜まあう小辨ハ伏見の賤き者の子なれども義少年と呼出

きハ

○ 小山田兵衛尉信茂ハ武田累世の長臣なり勝頼ハ叛き降参り

善光寺に在り信忠堀尾茂助も下知りてころせり則武三太夫

を討手とひ士一人とて甲冑を送り一礼せん時刺殺すの事あり

三太夫善光寺に赴き甲冑を贈りあはる由ひひが小山田出て

一礼せんも則武討てきたりやあて則武あつた武田の家

士大将とて數世重恩の身今度主君よ叛き不義の至り候故討手

よ参候ちち向りて小山田聞て口をく計られきたり首

を別られしども 則武猶動ず小山田刀は手とりは是迄は候  
といふ其時則武立あがりて首を斬りて

勝頼亡て後馬場美濃信房が女召出さるべしとて甲州の郡代鳥井

彦右衛門元忠は仰出されしに尋ねる候て行志おぼざる由を申す程

て其あり所あはる由を申し人のありきま東照宮何うよかくれぬ

御尋あり即鳥井が隠し置らる申すはばも登て

彦右衛門はめりぬの哉と仰せありきとぞ

○ 辻彌兵衛盛昌は天正三年の勅氣して七月甲州を出て信州小諸の

與良遠江がしよまのびみりしに勝頼亡て後徳川家は仕へ奉る

甲陽軍鑑に勝頼天目山は落行時辻一揆の長とありて攻らる由を

○ 明智日向守光秀信長を殺せしと思はる久し天正十年六月朔日の

夜明智左馬助光春と寝所よびりぬ人のをりて一大事の有

たり蚊屋の中より光春頭を蚊屋の中より入て何事とて候

と光秀汝の首を得る候とて秀俊聞て一人のしよて候し問光

秀三人の命をりしに猶足らざる故とて光春は易きこととて候

大事こととて成しとて光秀は問ふ事新に仰と日

比の恨思ひ合せて候とて光秀は信長を討んと思ふに汝を偏

に頼し思ふて先汝は語らんと思ひし中々諫争えし汝力を合

せし志遂げしに従ひて汝を斬んと思ひしに孟を出し光春

先臣一人の諫ししに外も語らるし

駟も不及と申事の候泄聞えて臍をかひも益きしとて打立たる

とて夜半計は俄に軍兵をたし出し明は二日此曙は信長の宿せ  
らり本能寺ととりかへし森蘭丸長定何事ぞ物さへしきとて  
白さかきびら上は浅黄ぬ子れ小袖をととり立出てるふ壁の外  
は水色の旗ゆる信長敵に誰と問ふに蘭丸明智にて候と申  
もててぬは箕浦大藏古川九兵衛天野源右衛門等大庭まき丸入  
信長白まひく物も着弓持て射られし弦とれり地臘脂のかきびら  
たす廿七八歳計の女房十文字の槍と持来とるを信長はつとりま  
か防り内よつと入て障子をひき立られども燭臺のいそぐれ  
ア火は信長のかげつらつらとて天野槍ととりぬ刺通は蘭  
丸弟は坊九十七歳力九十六歳なり切て出討死し隙は内よ  
ア火をとりけ灰燼とありとるなり

○

明智信長を弑する時秀吉は備中より毛利家に向て陣せり秀吉所  
はよきのびれ者も置き備中庭瀬にて怪げなる飛脚の者を生  
ぞりし秀吉其書を披きしに信長を討とるば秀吉必敗北とて  
一秀吉を追撃せしむ毛利家へつひ送る書たり一以書毛利家よ  
至らばいさ謀ありとるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
松の城のやまを攻落とるるる水攻にて日をへるる信長常は大功  
の速は成と思わぬの心ありと察しこれ故なりといふ  
秀吉備中を陳して毛利と和平せんことを計り密に手とて運ら  
し西國の米を價を貴く買き城米を出して賣者多し小早  
川隆景一人固く制してつとせび信長弑せしめて秀吉と毛利家手  
まはるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
るるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる

○

○ 明智江州坂本之城を築く時三浦といふ者

波すまふかたねはるきや雲の峯

光秀

磯山ついでひまろの松村

又光秀丹波龜山より愛宕まづる山に郭を築くは山を周山と名  
く自ら武王よ出し信長を殿の紂王とて心後よあはれは  
と人いひたり又志賀唐寄の松らの出り枯るるを光秀植つて  
今の松あり光秀よありて

これかして誰かうをんひつ松をうけて志賀の浦を

一説青蓮院宮尊朝法親王北辛崎の松の記とては大阪の城主

新庄駿河守直頼合弟松菴東玉雜齋直壽此雜齋天正十九年

卯の秋植る由其時の記

わのつゝ千代も経ぬ辛崎の松よりみよきありて

此松今の松に新莊の植る

○ 森蘭丸は三左衛門可成が子と信長寵愛厚し十六歳より五万石の

地をあたへらるる時刀をりて置き刻鞘の數をめぐ居り後

は信長くこの人をいつり刻ぎやの數をめぐりては刀をめぐ

き由のれを皆わりのては森はさふ數にて覺えり

とていふ信長其刀を森よりとらり信長森が明敏を試ら

こゝ多うなり一度もあやまちなく其才老年に人も及ぶよ非き

明智が恨ある事を察し潛し信長の前へ出て光秀飯をこむ

深く思慮する休て箸をとり落しやあつて驚く是れが

入る事別の子細へも候り恨奉る事ありと云はれ大事と  
くしそん刺殺まじしつひを信長の事と佐和山も終は汝  
つてぞいふ事ありて此の森にわたり先は父が討死の跡に候へり  
坂本を賜ふと申くると明智はちとていふ謬言なりと思ひ信  
ぜしれを果して弑せられき

○

光秀天正七年六月修験者を遣して丹波の守護波多野右衛門大  
夫秀治がりて光秀が母を質し出したりて秀治其弟遠  
江守秀尚共本目此城よ来りて酒を飲りて兵を伏  
せしめて兄弟を始徒者十一人を生とり安土につりて秀治は  
伏兵と散々戦ひ一時傷を蒙り途中にて死し信長秀尚已下を安  
土に磔し置りて丹波は残る者ども明智が母を磔りて

ア明智遊は赤井等を攻めて丹波を信長より賜りたり又信長  
ある時酒宴にて七盃入のさうらひを飲りて光秀は多のりて光秀思ひ  
よとすと辞し申せば信長脇指を抽き白刃をのりて酒を飲むま  
うと怒りて酒のくく其後稲葉伊豫守の家人を明智多く  
此禄をいへり出せりと稲葉求まらば信長は下知  
せしめりて肯り信長怒りて明智が髪を切りひきとせりて  
光秀國を賜へ候へり身の為は致さざとあく士と養はれ第一  
とひる由答りて信長怒りて東照宮御上京  
れ時光秀は馳走の事を命じり種々御食礼の設けり信長鷹  
野の時立ち見りて肉は臭氣なりと草鞋を穿てり光秀  
又新用意にたる處に備中へ出陣せしと下知せり光秀

忍くひて叛くは信長の暴かすに由り諷を待たず光秀  
土地を畧せんと為す老母を質ふしてその不孝を信長の賞せし  
まざる君臣共々惡逆の相あつて終つて令せざるに理なき

○ 光秀信長を討つ時秀吉備中より引返へるに時備前の浮田八郎  
秀家幼少をたゞも長臣老将の面々を謀ち名料をば先  
使を岡山の城より一刻も遅く馳上り吊軍を志候岡山を相  
謀ぐと云りせしは浮田八郎より光秀の心を通し久松秀吉  
の歸路をせしむるは久松秀吉の處にかく告來し久松城の中を  
討つて願ふ處の幸ありとひそかに悦あせて其謀をば相議し  
る秀吉六月七日の明かす高松より引返し午の刻に久松宮内  
着てやうやう岡山より赴くは久松秀吉の處にかく告來し久松城の中を

うらやまは秀吉家の使來し久松秀吉の處にかく告來し久松城の中を  
て吐瀉せし腹の痛少くやして寝入候とあひあひして時を移す其  
間秀吉は奥州驃と名馬に乗雜卒より吉井川をわたり片上  
を過宇根に馳つて久松馬つらひりて使を岡山より急ぐに  
候て久松道を通りて過候ぬとせらるるに浮田の人々皆あされ  
くはしむ

○ 秀吉信長の吊合戦せんと備中より引返へるに時姫路に立上るに  
しと人々も思ひくは黒田孝高姫路に馬を駐らるるに少の間  
然るに候くは久松秀吉の家出の遅々たる人情なり今度には主  
君の仇を討つて為すの軍に候大和の筒井細川を始り明智が  
しみちる者ども馳加へてやうやう大事なりとやせんと思慮のい

まづ決せし中よりさきでわしつらふれよ謀りてつらふれよ  
ひつれそ一人も姫路へよらん者も忽誅せよとれさせん  
孝高先達て人を走らう姫路の町人も河原へ出陣をま  
くして軍兵もてなすべしと下知しつらふれ食着を河原へ持出  
らうた立よびつて山崎表へお付られろ太閤記に姫路に  
二日滞留とて誤なり

○  
光秀信長を弑し時筒井順慶ハ光秀とまじり必與りて  
んと人々思ふ池田紀伊守其臣日置猪右衛門土倉四郎兵衛丹羽  
山城三人を使して順慶のりんやせし三人兼て順慶り明  
智よくを刺殺せしと申し紀伊守のやと汝等死せば片手  
を折しつらよ同一と制せしれつら三人つらよて順慶と軍せんよ

○  
つらふれまおひ討死し候べきは三人も討死せし候三人をも  
て多々味方つらよ順慶もつらよば光秀必敗北をアと申  
て順慶がしつらよ順慶出ちひていかで光秀が不義よつらよとく  
信長の吊軍せんつらよが偽りぬ体をつらよ三人悦て帰道よ  
て山城今日順慶つらよ刺殺せんと思ひて坐中とつらよとみ  
つらよ十六七歳つらよ男の順慶つらよ刀持て居らつらよ  
只者つらよ順慶よ飛つらよ頭二つ切つらよ見えつらよと語  
つらよ日置も土倉もさつらよ我等も思ひつらよ事つらよつらよ小  
性つらよ後よ牧野兵太とて武者修行して世よ聞ゆる剛の者つらよ  
光秀信長を弑して安土の城を攻つらよ左馬助光春よ守つらよ山  
崎よ打向ひ秀吉と戦て敗北つらよ光春安土を出て光秀を救うんと



京よりしてまゝに慶長とや光秀討まると聞えり。坂本の城に入  
くと粟津を北へ大津とまゝ行、慶長秀吉の先陣堀久太郎秀政  
も行あひたり。光春小勢をいづら破らぬ本道の敵よあつたつ湖水  
に馬をうち入る。わがせうが秀吉の軍兵ども汀に並居て溺らんち  
やうなを見ても笑ひあつて光春の白練の雲龍を狩野永徳のかせ  
たる羽織を着二の谷とつ子曹を着大鹿毛と名づける馬に乗年  
久し坂本に在て大津より唐崎までの遠浅はよくあつた。やま  
唐崎もろに乘あがひつ松の下を馬の息あひの薬を飼追来  
敵を見て居たり。又馬に乗坂本よりの時十王堂の前へ馬を  
わたり手綱をりて堂は繫ぎ矢立の硯より出、明智左馬助湖水を  
わたり馬をりて札よりして手とがらひ結つた坂本は城より

光秀の妻子へ天守より安土より光秀が奪り来りし不動國行ニ  
字國俊の刀薬研藤四郎の小脇差を業の肩衝し御前の釜たど  
る名物の器を唐織の肩衣を包み天守より投わりし。其後女童を刺  
殺し火をとりて自害せり。二の谷は曹と羽織と黄金百両添て坂本  
の西教寺に送り後中山城守長俊が孫作右衛門友俊曹  
をのぞき乞て得たり。程経て肥伊の士宇佐美造酒助孝定が許  
傳りぬ羽織の行方をあひ馬の魚双の駿足より秀吉志津嶽の軍  
よ此馬に乗らぬ。か  
○  
信長弑せりとき東照宮の泉州塚より一多に小勢をかく  
乱まると三河へ引とせむべしと人々つろを失つ  
東照宮素りの地理を考りしとれ河州飯森の宮の要害の地を

其地を守て軍あんと仰あつて森口は着せはしり時本多忠勝京  
都は御使は参りたる道にて變をき引返して来て敵大勢にて  
候らんと御帰國然るごとくと申はを聞し召案内者はいつも  
さ敵道と要らるる必定なりやと討まへ口をさしつと仰せ  
あつたる處は信長より馳走まつつる長谷川竹九當國の交野郡  
津田のあつる信長の恩を蒙る者れあま候へ道あまませ候  
べしと申し宇津越を経て山城の相樂郡を過木津川をわたりそ  
より宇治橋の上二里計東の瀬と涉て江州信樂は出るより伊賀  
比上野原伏兔越を伊勢の白子に至て船は召き然るごとくと定られ  
たり忠勝蜻蛉斬と名づく槍を提げ其邊の百姓を打具し此殿  
の案内申せしむてそより道はれ村々かくしつるは津田

より案内者來りぬ其日の山城相良郡山田村よりせしむ所  
々より心をよせ人々ともあま警衛し奉り穴山梅雪は入れし従  
ひ奉りかひき別れり

宇治より木幡越を江州高島に至り濃州に赴き甲州に歸るべき  
旨を申てひき別れり一揆の爲は山城の綴喜郡にて殺さるる  
ことぞ

其翌日本津川に至らせし中柴船二艘あり忠勝かんといつる肯  
むねはふくい奴を切て棄んといつる恐りそのせ奉るやうに涉りし  
りしをせしめて二艘の船皆打りて棄る其日の日一揆石原  
村はあつりて待りつる大和より従ひ奉り吉川善兵衛其子  
主馬助柏の木を馬きりて先駆けし追りふ柏を家の紋は

て仰有、くろくそ、り、宇治田原の地士山口玄蕃御膳と献  
て宇治川に至らせられたる船あり、榑原が士原田佐左衛門馬を乗  
入瀬づいて打らる、酒井忠次船一艘と、出いて渡り奉り、雜  
率に至るまで皆つらうことを得たり、江州信樂まで、嶮路を、警  
衛よつと、從つて、人々多く、一揆手ざれ、多羅尾四郎兵衛光  
敏ハ世々信樂を領し、其子長兵衛御迎、参り、人の心  
ア、人々恐る、處、忠勝、いやく、光敏御敵、あ、彼が家  
入らせられたる、一奉ら、一向入らせられたる、申す、皆尤あり、と  
立、御、を、設け、人々、勞と、忘、り  
又、忠勝、多羅尾ニ、心、あ、見、て、刺殺、し、  
故、立、せ、り、

五日、高見嶺を打越、御供、候、服部半藏正成、伊  
州生、の、忠勝、下知、伊賀の案内者、國士、  
す、警衛、奉、上、植、三、里、半、計、鹿、伏、起、と、深、山  
を、越、六、日、白、子、の、浦、つ、せ、ひ、長、谷、川、竹、九、秀、一、五、郎  
始、和、州、城、州、伊、州、の、士、御、暇、時、得、て、濱、松、を、  
御、を、衆、三、河、事、帰、を、  
ぬ、伊、賀、へ、去、年、九、月、信、雄、攻、入、て、打、比、逃、か、る、者、を、求、  
出、一、殺、害、と、専、國、士、も、三、河、を、参、て、御、恩、を、蒙、  
人、々、多、り、其、從、類、警、固、奉、り、明、智、と、追、討、  
の、為、御、軍、を、出、伊、賀、の、國、士、も、あ、り、参、り、多、  
く、大、番、入、せ、り、恩、賞、を、あ、り、

○ 黒田美濃守職隆後宗圃ハ備前國福岡此人あり播磨の小寺藤  
 兵衛政職ニ仕へて子官兵衛孝高後如水共ニ功名ありて用られたる  
 播州ハ其比所々人々地ニ據りて守て軍せし小寺ハ五着ニ在て姫  
 路ハ小城もかき黒田父子ニ在りて秀吉ハ其のそ信長の旗下リ  
 屬も孝高の子長政共比ハ松千代とひりて入質りて秀吉ニ居城  
 近江の長濱ニ置り此比毛利家ハ兵勢強ク小寺約ヲ變ゼ  
 んとし孝高死ハ然るに信長物ありて人ありて一旦天下ニ旗を  
 下りて行末ハあはれ先時の宜しき隨之松千代を棄て悲  
 みかく申すは非むしつらあり小寺聞入も孝高父宗圃ハ父子も誅  
 せしめぬべき密謀と告宗圃物ありて士五六人呼あつり所存と問  
 官兵衛五着ニ至りてあはれ危うく孝高ハ其の諫ハ尤あり

事見むし姫路よとて君ハ引をひくは非もや五着ニ赴き  
 てかき盡し奉公ハあはれ自害せん其後人々心と合せ父の御事  
 行のすむる由決断せしむ人々父子ハ隔らぬ候へば只  
 病して五着の奴原ニ使せし媚諂ハ欺くるあはれ討手来ら  
 力あり其後一戦を遂て五着を打破る罪ありて討んとする惡逆  
 此人天の咎ありんやと口々孝高各存むる言ハ誠  
 あはれ今病とのんは實と入必主君ハ叛くと人ハ誹ら  
 はん士の志ハ非む君ハ深く思ひ入る忠の空ありん運乃  
 さらあはれバカキ一人誅せしむる此姫路を  
 さまとて天下の安危歳月を經りて定むる色ハ  
 見えざる宗圃家の恥と思ひて身とせんと思ひ定むる士の志

候へ君の志はふももつねをひくべしとていふは孝高打ひまは  
 とて坐して人々只今思ひ召して仰せ遺言はあはれや  
 五著の難とのれんとていふは其時人々五著の城を執りせんと誓ひ  
 たり宗圓官兵衛の官兵衛をよ人々の志をよと下知せり  
 けい孝高五著を赴きて宗圓見たり子あはれも取りもきこもあり  
 先づいへ親の留りて子は死ねといふそ口をよきねはねども君  
 恩浅うとて人々の存る所なり今讒言を信ぜりこそ悲しく孝  
 高をやめて引り謀叛して命をよきまのぞく教へ父の道  
 は非を仇と取りて身を殺さる恥とて道ありとてさあくと  
 泣きたりとて五著していひていふは今姫路は引とひく設あ

一々酒をいりて時々舞うて日をわかれらるのいへ孝高の五  
 著は行て心おぼへる人のりよ使して求り来る音ありとて惣食  
 ちやふううて打つける体あはれいふつらふも心の外はあはれぬ  
 こゝろいへいひあはれ又いへ疑て黒田父子の謀りてき者  
 してよね士あはれあり城よこり用意せん間官兵衛を以て欺く  
 べき計をいへとて姫路の様を聞き宗圓金剛は舞ませ打と  
 する体あはれいへ別の事もあはれいへて以時攝州荒木攝津守  
 村重の毛利は属し信長と戦ひ利ありて有岡の城はひきこも  
 り此由小寺聞て孝高をよびて毛利よこりいへ内は荒木  
 といひいへる故なり今毛利家よたごんいへるわが過ありと覺  
 りいへるいへる此をいへて手ふれをせんよ表裏者といへるも口

もくもく有岡にゆきて荒木を諫めて聞入に秀吉に謀て  
信長と荒木和平を以て行ふに村重信長に従はば真の  
心をひかへて信長に従ふべしとて孝高を以て信長と荒木  
と和平の思ひより候りて荒木度々信長を背きしむるを其言を  
信ぜりて参りしつとていふに然も辞し申せば勇  
あきと似たりとて有岡に赴く路姫路に立りて父子對面し有  
岡に至らば必首をさめざるに囚とせらるる二つの中は過候ま  
し五着は死んより有岡に死候に信長も又世のやれとて  
ア候とて思ひ切らる色を宗圓見て涙をひきびきり物をい  
ざりしやあつて誠は困厄の至極ありとも名よきて身をさつ  
ハ義を思ふ故を以て見送りし孝高有岡に赴きし小寺

頼て村重に密に毛利は一味きまはる黒田父子人質の松千代と信  
長は出し置しむるに父子の織田は内通の志ありと告をせしむ  
有岡の本丸はよび入生より牢よりみたり五着は以由聞え  
し小寺いつつて齒がとあり荒木が狼籍の次第遺恨深し  
然も以上は信長は一味のこころを易て毛利は其に官兵衛を引  
し謀やあつてしむるに宗圓怒て官兵衛生より成りし  
是非の論に年老る身は子を失ひ候とて誠は力なき次第  
あり然も官兵衛をさくしむるに非きし先松千代  
も信長は出し候事し君も又臣父子に相計まる處にて候は令度  
官兵衛を有岡にて捕へし荒木が横をみれあり相つれ  
る處の人どもを棄ておしむる者をさくしむる逆なりと

道は随て天の冥見を待てり。ぐはれワき時より度々軍は臨こ  
 小寺は家の危難を救候は今齡くも長子をもて候  
 ころ口も候へども首も言あてり。毛利は一味せよと仰せ  
 ても得兼らむとて刀をぬき誓てり。使も言あてり。歸り  
 宗圓が士ども五着を攻破しんとしども用ゐる。村重心あつた  
 る。五着を攻む。村重も官兵衛を殺害せむ。あぬま  
 てもあふかかちんとて思て官兵衛が女房をば潜り。此引り置り  
 とて驚く。村重へ小寺よ。のちて孝高を生じたり。巴が  
 あり。非き。置り。かくて信長有岡と攻り。及び。毛利家乃  
 後。悉もせ。水城落り。孝高の牢の中にあつてあり。處  
 栗山備後。時々有岡はゆき。あつて商家と。ひ牢の後

○  
 此酒より姫路の事どもか。度々。案内を。牢は  
 走り行て見ま。番人も落り。終り。且悦て善助も置  
 る。芥を鎖を破り引り。三年居。み其上。又濕瘡を  
 病て起。あつて。牢中の人。かき。城を  
 寄手。陳はゆき。姫路は歸り。秀吉播州は攻入  
 る。及て小寺は但馬。行黒田父子危難を脱り。得て孝  
 高は突粟郡を賜り。姫路を秀吉の城と。後。如水と称し。智謀  
 たり。秀吉は功臣第一と聞えり。孝高は  
 黒田孝高播州。秀吉の命を請長。坪と。城を攻落し。井口猪  
 之助三宅藤十郎は其城を預け。孝高は秀吉の先陣。處は其城  
 より逃落る者。一族を催し。其夜攻。井口三宅人も少

く攻破<sup>サツゴ</sup>アて普請<sup>フシヨウ</sup>もいそいで守<sup>マモ</sup>アて殿<sup>テン</sup>の遠<sup>トホ</sup>くゆせたま  
 へ切<sup>キ</sup>めつてあつて後卷<sup>ウシマキ</sup>のこく申<sup>マウ</sup>まてと云<sup>イハ</sup>合<sup>アヒ</sup>せ三宅<sup>ミヤケ</sup>ハ百二十人  
 計<sup>ガウ</sup>て搦手<sup>ナシテ</sup>は在<sup>アリ</sup>一人<sup>ヒト</sup>數<sup>カズ</sup>を殘<sup>ノコ</sup>し二十人<sup>ニジュウヒト</sup>計<sup>ガウ</sup>を連<sup>ネ</sup>圍<sup>イ</sup>を出<sup>デ</sup>る敵<sup>テキ</sup>利<sup>リ</sup>  
 をめて攻<sup>ク</sup>入<sup>イ</sup>り井口<sup>イノクチ</sup>ハ大手<sup>オウテ</sup>にて防<sup>ボウ</sup>戰<sup>セン</sup>が翌<sup>アシタ</sup>朝<sup>アサ</sup>辰<sup>チン</sup>の刻<sup>トキ</sup>後卷<sup>ウシマキ</sup>の旗<sup>ハタ</sup>  
 先<sup>マ</sup>見<sup>ミ</sup>ゆる比羅<sup>ヒラ</sup>刀<sup>ヤ</sup>を片<sup>カタ</sup>股<sup>マダ</sup>を糸<sup>イト</sup>を落<sup>オチ</sup>され石垣<sup>イシヅメ</sup>より居<sup>イ</sup>られがも  
 敵<sup>テキ</sup>恐<sup>オソ</sup>まて近<sup>チカ</sup>付<sup>ツキ</sup>も最<sup>マシ</sup>後<sup>ゴ</sup>は大<sup>オホ</sup>音<sup>ネ</sup>あが城<sup>シロ</sup>の大<sup>オホ</sup>將<sup>シャウ</sup>井口<sup>イノクチ</sup>猪<sup>イノ</sup>之<sup>ノ</sup>介<sup>ケ</sup>を首<sup>ウチ</sup>  
 とれとて自<sup>ジ</sup>害<sup>ガイ</sup>しつう藤<sup>フジ</sup>十<sup>ジュウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>ハ後<sup>ノチ</sup>三<sup>ミヤ</sup>宅<sup>ヤク</sup>若<sup>ニガハ</sup>狭<sup>サ</sup>とて武<sup>ム</sup>名<sup>ナ</sup>あり猪<sup>イノ</sup>之<sup>ノ</sup>介<sup>ケ</sup>は  
 三人<sup>サンニヒト</sup>の弟<sup>ケイ</sup>あり六<sup>ロク</sup>太<sup>タイ</sup>夫<sup>フ</sup>甚<sup>シ</sup>十<sup>ジュウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>與<sup>ヨ</sup>一<sup>イツ</sup>之<sup>ノ</sup>助<sup>タケ</sup>といふ六<sup>ロク</sup>太<sup>タイ</sup>夫<sup>フ</sup>ハ播<sup>ハ</sup>州<sup>シュウ</sup>北<sup>キョウ</sup>條<sup>ジョウ</sup>の構<sup>カマ</sup>  
 を守<sup>マモ</sup>アて討<sup>ウチ</sup>死<sup>シ</sup>しつう時<sup>トキ</sup>孝<sup>コウ</sup>高<sup>カウ</sup>此<sup>コノ</sup>士<sup>シ</sup>罪<sup>ツミ</sup>ありて討<sup>ウチ</sup>手<sup>テ</sup>を向<sup>ムカ</sup>らつて  
 却<sup>シテ</sup>て討<sup>ウチ</sup>手<sup>テ</sup>を切<sup>キ</sup>て兄<sup>ケイ</sup>弟<sup>テイ</sup>三人<sup>サンニヒト</sup>町<sup>チヨウ</sup>は出<sup>デ</sup>大<sup>オホ</sup>なる屋<sup>ヤ</sup>を取<sup>トル</sup>りつう甚<sup>シ</sup>十<sup>ジュウ</sup>  
 郎<sup>ロウ</sup>見<sup>ミ</sup>てあつていふ孝<sup>コウ</sup>高<sup>カウ</sup>も再<sup>マタ</sup>三<sup>ミヤ</sup>宅<sup>ヤク</sup>は及<sup>およ</sup>ばずいふ

とてゆゑに甚<sup>シ</sup>十<sup>ジュウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>其<sup>ソノ</sup>所<sup>トコロ</sup>はゆくと忽<sup>トウ</sup>門<sup>カド</sup>の潜<sup>カクレ</sup>戸<sup>ド</sup>をひき放<sup>ハ</sup>し櫓<sup>ヤ</sup>  
 をつて飛<sup>トビ</sup>り戸<sup>ド</sup>を以<sup>もつ</sup>て二人<sup>ニヒト</sup>を打<sup>ウチ</sup>伏<sup>フセ</sup>せ一人<sup>ヒト</sup>ハ切<sup>キ</sup>殺<sup>コロ</sup>し打<sup>ウチ</sup>倒<sup>タ</sup>し二人<sup>ニヒト</sup>  
 も切<sup>キ</sup>て首<sup>カビ</sup>三<sup>サン</sup>つとつて馬<sup>ウマ</sup>は兼<sup>カミ</sup>二<sup>ニ</sup>町<sup>チヨウ</sup>計<sup>ガウ</sup>歸<sup>カエ</sup>る所<sup>トコロ</sup>は罪<sup>ツミ</sup>科<sup>カ</sup>人の從<sup>ツグ</sup>者<sup>モノ</sup>主人<sup>シヨウジン</sup>乃<sup>ハ</sup>  
 首<sup>カビ</sup>とみて槍<sup>ヤヤ</sup>を甚<sup>シ</sup>十<sup>ジュウ</sup>郎<sup>ロウ</sup>が馬<sup>ウマ</sup>上<sup>ノ</sup>を以<sup>もつ</sup>て飛<sup>トビ</sup>りつう突<sup>ツク</sup>つれ其<sup>ソノ</sup>  
 者<sup>モノ</sup>を切<sup>キ</sup>てきていふも痛<sup>イタ</sup>手<sup>テ</sup>にて馬<sup>ウマ</sup>より落<sup>オチ</sup>少<sup>オウ</sup>時<sup>トキ</sup>ありて蘇<sup>ソウ</sup>生<sup>セイ</sup>しつう  
 を戸<sup>ド</sup>板<sup>イタ</sup>よせ來<sup>キ</sup>る孝<sup>コウ</sup>高<sup>カウ</sup>膝<sup>ヒザ</sup>を枕<sup>マク</sup>しを手<sup>テ</sup>ハつて問<sup>ト</sup>ふ如<sup>ニ</sup>興<sup>キョウ</sup>候<sup>コウ</sup>  
 と一言<sup>イツゴン</sup>いひて終<sup>オハ</sup>る兄<sup>ケイ</sup>弟<sup>テイ</sup>三人<sup>サンニヒト</sup>皆<sup>みな</sup>死<sup>シ</sup>る報<sup>ウチガヒ</sup>ゆる詞<sup>コトバ</sup>を  
 とて孝<sup>コウ</sup>高<sup>カウ</sup>其<sup>ソノ</sup>父<sup>チチ</sup>與<sup>ヨ</sup>二<sup>ニ</sup>右<sup>ウ</sup>衛<sup>ヱ</sup>門<sup>カド</sup>が宅<sup>ヤク</sup>は自<sup>ジ</sup>往<sup>キ</sup>て吊<sup>ツル</sup>りれ與<sup>ヨ</sup>一<sup>イツ</sup>之<sup>ノ</sup>助<sup>タケ</sup>七<sup>シチ</sup>八<sup>ハチ</sup>歳<sup>サイ</sup>を  
 を呼<sup>ヨ</sup>出<sup>デ</sup>さる既<sup>スデ</sup>は九<sup>ク</sup>つは成<sup>ナ</sup>る比<sup>ヒ</sup>三人<sup>サンニヒト</sup>の兄<sup>ケイ</sup>ハ勇<sup>ユウ</sup>氣<sup>キ</sup>ありて者<sup>モノ</sup>ありけ  
 りも人の生<sup>ナ</sup>質<sup>シツ</sup>ハ計<sup>ガウ</sup>づくは試<sup>シ</sup>んと思<sup>オモ</sup>ひて磔<sup>シバ</sup>を見<sup>ミ</sup>つるやと問<sup>ト</sup>ふ  
 は見<sup>ミ</sup>どく答<sup>コタ</sup>ふ今夜<sup>コンヤ</sup>ハ月<sup>ツキ</sup>明<sup>アカ</sup>りつう所<sup>トコロ</sup>の礫<sup>シズク</sup>木<sup>キ</sup>の下<sup>ノ</sup>はツとる



をばて帰人やうらうら美候とて自御幣と切て竹こつてあて  
らうと興一持行て立んとまらぬ礫木動くと見て死にぬる留まじ  
てとまんとて木よばがよま驚て礫木より飛下り逃るを興一とて  
あつて次第ありけりやうと追つてせん方なく宮のちり内へ入戸  
まらばらうと待ても出るとまんと物とて呼ぶまらうと  
名とての帰らぬ殿の仰ておのの為に来りてをせ  
まの帷子の片袖を證據とてゆきぬとて帰るぬ其後朝鮮  
の後ま朝鮮人竹木も廣野は一筋の道窪くて切通しは似て其向  
ふ所大山の麓とて曲尺は如く大穴を穿ち射手を籠置て行か  
る日本人ちり射殺され屍相重なり山にげは敵多少をまらぬ  
まらぬ者あり井口より従者山崎喜兵衛見て参り馬と扣て待ま

候へといひまて走りこむ井口も馬より下りて走り入山崎先射手  
三人を討とり其首を持って大音あて名のりて井口攻入追ちん  
井口其時の兵助といひたり以賞美は朱柄の槍とゆき候へと申に  
巫ふふゆが一日は首七つとて朱柄のゆきと申傳  
へて候と人々申くる故と延らるが其後井口一日は首七つ山崎も  
首六つとて朱柄と兵助はゆきとゆき晩年は村田出羽吉次  
と称しけり

○

別所家より首供養ある人ありと孝高聞て秦桐若首三十一と  
惜むと死にぬる吉田六之介正利供養まといひれま  
は正利首數二十七とて候とて辞しとて孝高小氣なる男  
れ今年三十一歳より以後首とるやと先供養して後其數

と合せて米百石ありて供養して播州青山の南に塚を築き  
より後所々此合戦朝鮮の軍やてより首五十より及ぶる後  
岐とよ

○天正五年黒田孝高播州佐用の城を攻る時生田木屋之今夜中  
忍びて城際より近づきより懐中の小鋸を以て屏柱の根を切目  
しして翌日城攻より柱は鈎繩を付て引倒し先がけして城  
入りて木屋之介より隅田小介より日向國隅田刑部少輔が嫡子  
あり十六歳の時傍輩を討て出奔し播州より行で孝高の士井上  
九郎右衛門を頼りけり留置しむる處より其夜隣家より  
人を殺し取り取りける者あり夫とてかち出さる付即時孝高より  
申てそれより奉公せり播州生田の城より高名ありしがより生

田木屋之介と姓名をいひしは是の高名をいひて頭ん為りや

○文明十五年十二月十三日備前福岡の戦

備前より赤松氏世々領せり嘉吉元年赤松満祐滅亡の後備  
前より赤松相模守教之を賜り教之が代官小鴨大和守備前  
在應仁の乱の後備前津高郡金川村玉松の城主松田左近將監  
元成と細川勝元相くひひ元成兵をとり小鴨と攻んとん  
るにより赤松の家人ちりくはあり者共元成より小鴨を  
攻れぬ赤松兵部少輔政則元成を賞して伊福の郷に置ぬ山  
名宗全細川勝元共は病死の後京都ハ少あつたれども諸國を弥  
大に乱し松田が一族とも備前西郡の中あまの押領を政則と  
將軍家より功を賞せられ播磨備前美作を返し賜りぬ山名右

衛門督政豊、怒りて文明十一年九月京都を出て但馬の國よ  
 馳下るがね、政則も播磨に馳つて以つて備前の松田が怒り  
 攻どりける所を細くもたせんとせり元成、由とて兵糧用意の  
 為とて所へ返もせられども伊福の郷に於てハ軍功より賜り  
 たる處を返さざる事、托してわねを打亡きんの謀あり  
 んとて金川の城を構ふ、城ハ麓ハ大川流き、峯高く四方峻  
 て要害の地あり、されども後卷の手びてを謀り備後國山名俊  
 豊に告て備前を切とりす、わねとていりね、俊豊是を悦べ  
 政則備前よ赴き松田がわねに已が地より所々をとり返り、  
 ハ文明十五年九月山名も備後の尾道を出て同國國分寺よ著  
 三千餘をとり、催し十一月七日備前の國よ打入り、松田が一族

相あつり、邑久郡福岡の城の西北の山に陣どり、福岡の城ハ東  
 西ハ大川流き中ハ嶋山あり、城を據て政則の守護代浦上喜三  
 郎則國を始とて二千餘人たて籠り、川上の瀬ハ長船右京亮  
 等ハ野伏を添て陳どり、十一月廿一日、合戦あり、浦上  
 が家人ハ橋村、三兵衛同又四郎とて兄弟あり、是より前ハ元成  
 奉公し、因あり、密よか、十一月廿三日夜半風を  
 使し、陳屋ハ火をく、守手内通ハ力を得てやがて攻、  
 城の中をめぐり支戦て追返も、其後事あり、橋村兄弟  
 をか、小山ハ兵をよ、寄手其後相つり、十二月十三日又富  
 岡とて小山ハ兵をよ、城より打て出散々ハ相戦ふ、寄手も  
 城兵も討り者多し

福井小次郎ハリと京都の人ありて四歳の比父源左衛門當國の在  
番れ時連下り城中ありて一廿一歳なり其日軍軍父子  
の間を敵味方より隔れ父の城中に入ると思ひ走り歸りて  
尋るよもなき横さま一切て廻りてあつたは戦ひ疲まりと家人肩  
乘りては横さま一切て廻りてあつたは戦ひ疲まりと家人肩  
よりて城中に引入りて浅手深手二十六所被りて終に死し  
父城に歸りて小次郎が手箱を開て見るとあつたは書置ける其中に  
母の方へ幼少より別ますのせてあつたは討死せば御せがさあつ  
んこと心より候へまが一此世は残りたはまとも終に逢奉るべき  
とて候へと思ひてわがあつたは候へとあつたは候へとあつたは  
生まるとあつたは候へとあつたは候へとあつたは候へとあつたは

○

文明十六年正月六日又福岡にて軍あり城兵敗北する處に薬師寺  
四郎左衛門薙刀ととり返り合せ爰に討死せしむとて支戦ふ同  
蒲四郎等四郎左衛門を討せしむとて返り津坂の山に麓より城  
際より僅の兵にて多勢を防て拂退しあつたは寄手れ中より福屋九郎  
右衛門とて剛の者鉄形打する曹と着透間もあつたは四郎左衛門  
切てかゝりて四郎左衛門の家士返り合せて福屋の討まぬれ  
ども寄手彌おひつりて薬師寺次郎左衛門額田十郎左衛門  
片岡孫左衛門三人引返り枕をあてて切死しあつたは是ハ三人  
必死を約束する故とや是より先三人物がうせし時次郎左衛  
門のひくるとあつたは度の軍必味方打す松田ハりて當國の者

かり後巻を味方より申せども播州の加勢も来らば政則真弓峠  
の軍は打たけ姫路より引退し聞ゆれば味方ハ力を失ひぬさへたとて  
も討死せむき身よそ人の後より入てあんなも本意はなむ重て軍  
あつた必討死せんと語るるは二人聞てはしくも同じく存すべく  
むとよ互は同じ所よ討死せんと約束しけらふ今日次郎左衛門打  
出るると唯今敵の手よつてふき首あり最後の對面さへとて鏡  
よ向ひてあつくと笑ひて出るとを額田の岡本筑後守よ向ひて子  
て候又三郎ハ一子ありはとうつて不使よ存すありわれと一所あり  
らば必死ものなるべし互に計ひしむるは心得ると  
て引つらふとて討死せむさうしとあり片岡のころ家来よ向  
てふ首必敵よとてあつた死骸を尋ねよとて小よ

アをもて樹の二の腕を二重に結むをたうが果して是をあらし死  
骸を求め得るや

常山紀談卷之五終

常山紀談卷之六目次

- 一 山崎合戦の時堀秀政寶寺の山々をとり事やまざき
- 一 森寺政右衛門武名れ事もりでら
- 一 則武三太夫功名の事のりたけ
- 一 瀧川一益厩橋と退く事たきがわ
- 一 光秀愛宕山よて連歌の事ひろひで
- 一 幸田彦右衛門が母義死の事きこう
- 一 志津が嶽合戦秀吉智謀の事しづが
- 一 堀七郎兵衛見切の事ほりしちろう
- 一 志津が嶽七本槍の事しづが
- 一 石川兵助戦死れ事いしかわ

一 佐久間盛政生捕る事 附 久右衛門安次源六郎實政事

一 尼子家の十勇士

一 信雄長臣を誅せしむ事

一 平松金次郎始末の事

一 水野勝成高名并行状の事

一 本多忠勝忠勇れ事 并 忠信の曾れ事

一 榊原康政秀吉を誹りて礼を立らぬ事

一 初鹿傳右衛門事

一 秀吉東照宮の御陣へ戦書を贈らぬ事

一 東照宮蟹江御出陣の事

一 東照宮の御軍畧に依りて蟹江城降参の事

一 九鬼嘉隆蟹江の湊出船の事

一 中村一氏紀州の一揆を追拂はぬ事

一 竹中重治れ事

一 戦國れ士功を譲る事

一 羽柴勝雅敵を免る事

常山紀談卷之六

備前國 湯淺新兵衛元禎輯錄

○ 山崎合戦の時堀久太郎秀政は士の子何れも之る者明智が来た  
 奉公してありしが光秀夜のいふに明さる内は寶寺の山は兵をた  
 らしと謀るをも父のいふ告やアそわひひと敵味方ある明  
 日の一戦は及ぐんことを歎き其書状を則秀政に見せしむるに  
 秀政夜半は寶寺の山より上陣し待たせしむるをいぞ知る  
 き夜明けは明智が先手押寄する處を秀政山上より銃砲を打  
 不意に切てかき追崩して一戦は利を得たり

○ 山崎の合戦は明智が先陣と護國公の先陣と戦ふに時侍大  
 將森寺政右衛門忠勝真先りて敵を追はるる森寺が馬印檜木笠



ありしと明智が者共見てくふ檜木笠の馬さし持せらる大剛の者  
下知せしあつても目されらる候姓名を兼らるやと度々呼り  
くもて秀吉聞てくふの軍森寺が一人の武名をあげしと桐の紋  
付くる羽織とあきらめたり

○山崎の軍は堀尾帯刀吉晴の士則武三太夫首と取て吉晴の前より  
来り吉晴むひひしうも出りしと詞をくくはしは則武怒  
て首を提てきみよりかふる時大將も目れくくある物候則武  
三太夫が取くる首よく御覽候へと罵る吉晴もあつて奴哉といふ  
ちん刀を袖て斬らるし曹れ星を削りし則武真一文字よ  
敵の中よかけ入又首を取て帰る吉晴は必則武の討死せん悔  
おひんまり處は則武来りば大は悦んで汝とさきよめらる詞賞

とる餘りよひりし剛の者よりなき詞あつては過  
てはあれ汝が二度の先がけ大さよまがけと感ぜられたり

○天正十年瀧川左近將監一益の信長の命より関東は管領として  
諸將の質をとり上野の厩橋よりくる處は六月七日信長弑せし  
れ變をも聞老臣も事をかかるといふも一益悪事千里との不謗あり  
秘するも能わどとして上州嶺の城主小幡上総介信真鷹巢の城主  
鷹巢三河守信尚金山の城主由良信濃守國繁館林の城主長尾但  
馬守頭長小股の城主法川相摸守義勝倉賀野の城主倉賀野淡路  
守秀景白倉の城主白倉左衛門佐藤岡の城主内藤大和守秋宣安  
中の城主安中越前守高山の城主高山遠江守重光五開の城主五  
開刑部小泉の城主富岡六郎四郎石倉の城主長根縫殿介大戸の

城主大戸民部直光木部の城主木部宮内貞利和田の城主和田右兵衛  
 大夫信業那波の城主那波對馬守宗元武州忍の城主成田下總守深谷の  
 城主深谷左兵衛憲盛松山の城主上田又次郎政朝等の諸將を招  
 き信長の變をつげ各の人質を歸し上京して吊軍を乞ひ  
 諸將大に感得此の大事を告て人質を歸さし候より  
 二心候べき人質を其も置て仰み従ふと云ふ一益諸將の義  
 心謝する詞も候はば北條の表裡定めて一益を討取て上野を  
 取べき方より打向ひ一軍せんものとて城より同姓の  
 彦次郎忠往と守り置一万計の兵を率て神奈川より押出せ  
 一説は北條家より人質を渡し城を出よきは一戦を  
 と言送り一益吾信長の命を受け関東の管領より今危は臨

て何が北條が下知は御べきやとて兵を出せりともいふ

北條氏直果して小田原より兵を出し武州児玉郡本庄より着て先  
 陳北條安房守氏邦神奈川より寄り一益の川を後して相戦ふ大  
 敵支かゝり討る者多し一益厩橋より歸り其日討死せし人々の姓名  
 を過去帳に書て黄金を添へ寺に送りて供養し諸將をあらはし職乞  
 とて酒宴し一益敵を討ち其の交り頼ある中れといひ倉賀野  
 路守を今いと鳴りしとて終夜酌酔て太刀刀取出し上州  
 の諸將を引出物より懇に職を乞て六月二十日厩橋を打出て各人  
 質を歸し皆請取むて驛馬等此事沙汰し是を送りて  
 笛吹嶺に至る時國人の人質悉く歸り木曾路より歸京し瀧川彦  
 次郎ハ一益が長男三九郎二男八丸を伴ひ木曾路よかる時一揆起

八丸を奪ひしを益が士古市九兵衛一揆を追拂ひ八丸を奪ひしを益と同く長嶋よ帰る

一説神奈川の合戦は八丸生捕まり古市追討て其敵を切らせ

八丸を奪ひ取て連帰るといふは笹岡平右衛門津田治右衛門

を留めて討死し其間一益兵を收て厩橋よ帰るといふ

笹岡平右衛門ハ一益の馬より取りとれ氏の笹岡彦次郎

是を以て武功度々及て士大将とあり武者奉行より酒

宴ハ倉賀野よてれしもの

○ 関東より一益厩橋を引りしはつる中ハ殊ニ賞美一けし

天正十年五月廿八日光秀愛宕山の西坊にて百韻の連歌し

光秀

西坊

花むつるをしののめをせしめし

明智本姓土岐氏を以て時と土岐とよみを通りて天下を取の意

含めり秀吉既ニ光秀を討て後連歌と聞大ニ怒て紹巴と呼天が下

きてしは時ハ天下を奪ふの心ありしは汝ありしやと責らる紹

巴其發句ハ天が下なり候と申あつる懐紙を見よとて愛宕山より

取来てしは天が下しと書むる紹巴涙を流し是を見賜へ懐

紙を削て天が下あると書換る迹分明なりと申さみながあり書

へめし秀吉罪をゆるされり江村鶴松筆把りあり下しと書

しは光秀討まて後紹巴密ニ西坊ニ心を合せて削て又始の

とあり下しと書むるけり

織田信孝秀吉と弓箭をとり時信孝の乳の人を人質に秀吉はよ  
 出に置きしと礫を以て誅せしむかの乳れくの子に幸田彦右衛門と  
 て信孝の士大将あり是より前秀吉信孝の長臣等をかゝりて岡本  
 下野守に同心して信孝に背きしも幸田に背きし幸田が母誅せし  
 るに及て子に彦右衛門の書を送てて我今空しく成しゆり歎  
 くべし親の必子に先づ習ひたり唯忠義を守りて君を背き  
 参らせし言遣りし言ひ聞人感しあり天正十一年四月十八日秀  
 吉の先陣信孝に地を責入る時幸田兄弟いまだ討死ししを  
 幸田が母の實は漢の王陵が母の志とも云つべし但し王陵が母は天  
 下をあらりし人高祖の事を識ししのみ只今危難に迫りし  
 織田家の忠を盡せしむる真にありし人なり

佐久間玄蕃盛政柳瀬にて中川清秀と討取りし時秀吉長濱よ  
 り一騎りけりて来りし志津が嶽に到り日暮ぬ陳の相去る  
 事二里計かり盛政使を以て早くも軍をよせし候相待候なり  
 夜明ハ矢合仕りし言送りし秀吉聞て是より申さん  
 伊も兼候明日いまだ軍をよげ候べし使を返して  
 後吾も急らせ夜討せんとのいふ遠き異國の張良の志  
 我を識る者日本にありし覺えし野も山も心を透  
 間あく焚て白日の如し佐久間の敵入馬の行程を急て疲ま  
 處へまかりと押しを打破らんとむらひむらに秀吉に誅し夜討の支  
 度空しく成りし  
 志津が嶽の合戦に堀又太郎秀政兵を分ち出さんとむる時其臣

堀七郎兵衛押留て日勝家の陳より佐久間が陣は頻に使来ると見ゆ  
疾引くれもの事ならん若引取ハ玄蕃本の道より帰るべし  
間近き所を戦あはれし玄蕃引取むん勝家必来て軍あはれし  
つぎ出べし兵を分て待べしとらふ玄蕃も退き柴田も進  
まらぬ勝家運盡しとて言し果して敗北しとらふ又志津が嶽  
れ事を老功の人よ問し勝家れ詞のいづく玄蕃引取ハ勝利を全  
くまじく玄蕃の言の如く勝家押詰来らば必敗軍まぢきりし  
將互は猶豫して勝を失ひしとてかへりし  
志津が嶽して佐久間の人數乱るべきと秀吉見て近習れ人々も向  
て爰を槍を合せしとて詞をけりし各競ひ進む福島市松加藤虎  
之ハ加藤孫六郎片桐助作平野權平脇坂甚内糟谷助右衛門七人

○

あり其夜秀吉今日七本槍の者として呼まれしも誰とて事とま  
らば其時指を折てかへりし前より進しより是より志津が嶽  
の七本槍と世に唱へたり中より福嶋壹番は進で槍を合せり上首と  
取たりしは五千石ありしは其餘ハ皆三千石共へりし福嶋ハ  
紙の切裂とあるの指物加藤嘉明ハ紫やろ清江ハ紙のあて馬まん  
片桐ハ銀の切裂えつる平野ハ紙子の羽織糟谷ハ金の角取紙のえづ  
るれ指物とれしとて

○

志津が嶽の前夜石川兵助と福嶋市松と口論し既ハ刺違ふべき  
体ありしと坐しあはれし面々明日ハ軍は身を捨て高名を遂らふ  
まよふしとあるしとて押留るし石川面々れ前より口も澤明が  
市松何とてとて槍先は向ふと明日ハ後影を見よとて言捨

て出々直柳瀬に赴て只一人真先よみて討死し其  
勇氣はいつくも其怒るも戒めしとらひあつる秀吉石川が  
弟長松又感状をあらはれり其文曰

今度三七殿依違軍美濃大垣之處柴田修理亮勝家出張柳  
瀬欲遂一戦之時兄兵助先赴合槍今撃死拔群之擧於眼  
前見之爾雖為若輩念兵助之壯志與秩千石向後愈可抽忠節  
者也

天正十一年七月五日 秀吉

石川長松殿

とかけり

志津が嶽に軍破をく佐久間と生捕来る秀吉見て汝ハ武勇逞し

た者ちり助て國を興ふ二心ありんやと問ふ盛政冷笑ひ我ハ國を  
興へば汝を生捕擧る事今日我身れ上の如くせん新ハ恩を受るも  
柴田を忘らんやとらふ死をく及で大敵紅裡廣袖の小袖白帷子  
は空に舞りて吳らば一生の終は風流と盡し是ハ一つの望を  
アと言ふ秀吉其望を承せしむ大に悦んで是を着と  
アタリ玄蕃其時亡七歳と云ふとみあへ

柴田亡て後其従子佐久間久右衛門安次源六郎實政兄弟紀州  
は遁き粉川法師三油をく河内霧坂に城を構へ後南河内  
天野山の國見を要害として度々軍に逐ふ秀吉は攻落し  
る後小田原に入北條亡て兄弟金澤の称名寺あり秀吉つ  
くく伯父勝家の為は吾を仇とせし志誠は大丈夫とらふ

今日本平均一萬石を改りて安次は一万五千石實政は壹  
萬石共へて蒲生氏郷に附らる兄弟氏郷は一禮一々時蹟を  
入皆笑しる氏郷物の思慮なく汝等が奉公せりと彼は競ぶ  
しよ兄弟とも疊障の士にあらざる物と言ひたり

○尼子家十勇士と世に唱へたる山中鹿之介藪原茨之介五月早苗  
之介上田稻葉之介尤道理之介早川勉之介川岸柳之介井筒女之  
介阿波鳴戸之介破骨障子之介なり

○秀吉信雄を打亡さんと謀て先信雄の長臣岡田長門守津川玄蕃  
浅井田宮丸滝川三郎兵衛をたゞと懇りて後信雄は自害と  
まゝとさる恩賞あつて行ふと語らるる間入る首と刎ん  
氣色あり上神文を書くと責らる四人力を兼ぬと言て起請

文を書きしより秀吉も約を背くと神文を出さしけり是ハ一人づ  
かゝるへと一同一招しる信雄は告知らる者ありて残りの  
を誅せせんとの謀たり又皆秀吉は實は心服せしむも既し神  
文を書しる疑ひて一和せしむ思慮せしむありて滝川素  
僧ありしを信長呼出し四万石の地を賜り身ありは長嶋は帰  
て信雄は斯と告申せし頃て三人を誅せんとて長門ハ飯田半兵衛  
玄蕃ハ土方勘兵衛田宮丸ハ森源三郎と討手を定りしより土方  
兼アて長門を臣に仰付られ候へ打留申えんとて飯田既し定  
まらるる何の申條のあそきなり信雄は長門を土方  
討候へ飯田ハ既し下知しる討らるる同しとて長門を土方  
討らるる土方ハ斯言らるる故あり土方ハ始彦三郎と云らるる

胸より手足に至るまで毛生熊の如くして勇猛の士あり長門常  
は土方よ語りて殿へ人の申き事軽々しく信せしめて日比我よりとま  
りて度々去るるを土方夫はたゞうらやま又ハ汝の心れ違ふるあんと  
いふ長門よやく以長門よハ必誅せしむ其時汝討手キキきよ  
やましく討るべき身にあはべとのハ土方聞て討手の仰を奉らんよ此  
勤兵衛ありて又誰かあへきと語るるよ長門仰よ寄て此七ッ胴切  
落しける脇指うて汝が頭を斬破んと去るる詞は依て斯ハ申せし  
て天正十二年三月三日の禮は岡田信雄の前よ出るるを相圖とせ  
らるる岡田其日ハ脇差を横へて進み出る信雄新に造らせける  
鉄砲を見よとて指出し以墓尻の穴ハ何の為と問るる岡田少志  
差うらひく時土方つて寄引組より岡田已とやとりうらひく脇差を七

八寸抽くれりも大カハ強く抱くれて抽もるるにむら合くる處と信  
雄土方放せ我自ら切んと詞をかゝるる臣と共に斬せしむる  
まをむべ信雄放さるるにうらやまも斬すといふるる土方岡田と突  
ひあひまらん小脇差を抽て指通せば信雄もむら切て殺さるる津川ハ  
此騒ぎを聞て走ア来りて信雄は行逢刀を取延て切らりしは廊  
下の長押よ切付らるるを飯田傍より刺殺しるる浅井をば森討留  
て是よりいふ秀吉と弓箭をよむる

○

平松金次郎重之甲州の温井と同一く天龍川を渡る平松先達陸  
よ上ア船よ残まるる従者温井は無礼の事ありて忽ち切殺しるる  
平松は斯といふもあつてと言ふは無礼なる者ハ吾も捨置トとて  
色も變ぜば人よ平松を誅する處よ幾程なく長久手ハ軍よ平



松と鳥井金次郎と先を争うて槍を合ひ平松が相手ハ森武藏守長  
 可の士山田八右衛門とて始播州三木の城主別所長治は仕へて名  
 高き勇士あり平松肥やうして小男やうして東照宮まで走廻り  
 不自由やうして常は笑ひせよひよ其日御前より進み出歩  
 者今日槍を合せて候と立ちしり申て傍若無人の有様あり賞せ  
 らるゝも猶不足はむいひるゝ前田利家ハ士山田出羽其時平  
 一郎とて秀次は仕へし秀次は申て一万石の禄をすわぬはる平  
 松是は約一京に赴く時心易き朋友は暇乞へて立去るを聞し召  
 追々追手を出させし大剛の平松あはれとて第一番は渡邊半藏  
 續て河村善七郎大久保典一郎坂部治兵衛段々追うけたる坂部  
 袋井とて逢平松ハ久能へ行本坂越は遠州可睡齋の曹洞宗立守

と物語り坂部ハ兄三十郎は用の事ありて横須賀へ行とて打連  
 道の別際とて久く逢し馬より下で暇乞むる時坂部平松を一太  
 刀斬りてさうしてさうして切ぎりたる平松坂部が眉間を切り坂  
 部眩くらむもさうしてもの者して落人あり打留とて呼しを聞近所の郷  
 民群で出るより平松可睡齋へ入るとて取圍り横須賀より馳集  
 り寺を取巻くも平松は爰は居らぬとて小僧を捕へて責とて  
 けり平松何方へも逃る者あり爰は腹切んとて立出坂部三十郎  
 は向ひ治兵衛は殊に親しく語りて不便を言ふ身も火を  
 らひて是非を切るとして三十郎聞て治兵衛疲浅くと答ふ平松吾  
 斬る程を助るもや日比の交り故とて刺さるきといひて腹切とて  
 三十郎ハ錯せんとて平松治兵衛と吾手わけ今汝は首を

きん心よりいふと同心せりあり

又一説云平松の度々口論の時後まあり殊に遠州新井の渡り船にて柏原新五郎平松の従者と討つるにわらうとてあつたが人々嘲笑ふ東照宮聞し百人の何とも之平松が眼ざし剛の者あり仰せしは果して長久手にて懸るひる處は平松苗の羽織を着し文字に槍を提し出池田家の軍兵の真中へ槍を入り其後出仕の中へ諸士に向ひ吾胎内より厚恩を請みし一命を捨しと思ひしが今早思ひ残さしとあり誰とも出らば撫切をせし昔の金次郎とを思ひし殊の外あり者も成さしと大言しつる一人も答ふる者あり平松が勇名高く聞えて先年天王寺勝曼れ槍具殿塚の槍備前八濱の槍とを言傳へし平松が槍を

近き比されあり世の人賞しき秀次一万石を招くは平松立退くを聞し召小栗又市渡邊半藏河村善七郎坂部治兵衛を追手に出させし岡崎へ早飛脚にて本多作左衛門も御下知あり平松終に袋井の北あり可睡齋にて自害せしといへ

○長久手の軍は水野忠重の嫡子勝成へ目を病て曹を著し鉢巻しつるを父見て汝が曹はゆる壺をさるる罵らし父あり餘りの詞を真先りけ首を取り吾首を敵もつる二の中よりふり馬引寄て打乗りし鎧をめてか出を忠重あはれし太田重助とよ士を呼帰さし耳も聞入り又水野喜右衛門を来り引とらんとまると勝成も睨で畳の上れ諫め聞も入る

只今大軍中よかろし功名せん時止むとて引返様やあつといひまて  
秀次の將白井備後守が陣に突てくも曹首をとりにてりせ帰る此日の十  
番首あり勝成あつ者として人を物ともせむ忠重の心は忤ひ虚無僧や  
あつ國々をめぐりて武者修行も後忠重死して東照宮勝成り  
三州芥屋を賜り日向守と稱して大坂の時大和口に先陣として大  
功あり一人を勝成十萬石を賜ひて後愈士は下り身を以て  
てまて士は貴賤はあつれをり主君とてり從者も少く互に頼るあ  
ひてく世に習ひては大事の時へ身をまて忠義をわし事ぞ  
一汝等我も親と思ひし我汝らも子と思ふと常士といふは  
年老て鷹野へ出る時行歩りあつ蒲團ははつて士はかれ士番所は  
てらぬん共は下は居て年寄りの鷹狩もかづ一鳥もぬ為るあ

美作守の勝成の子

らげ心あつこの事ありく度々ソひて打過らゆり或時鷹狩の野に  
昔勝成は仕へ士を見しソふあつや我方は禄三百石ありし  
立去て越前へ千石の禄ときく今爰は来らるらん問は彼  
士仰の通禄は越前へ増候へ殿の下をり懇よりあつ  
まあは禄を換へて暇乞うて帰る候ひぬと申せ勝成大は悦  
び折るれ思ひ出せりありとて即日禄を増與へらるる其後勝  
成隠居して又鷹狩の時彼士は家の門閉らるを見てソふと問は  
は美作守は心は背く事ありて暇を乞走らるる答へは彼者を越  
前の禄千石を捨て小禄の我家を去りて帰る者なりしは作  
州へ思へるやしく勝成は若き時心得過て武藏の金川根笹流の  
弟子となり尺八一本携へて虚無僧となりて日本國をめぐり或時

堂塔よ夜を明し或時ハ野も山も日をくく様々ハ艱難あり  
人にも誹ちりか一言虚妄といふも不仁のあつひせざりし  
今福山十萬石を賜ふぬ然も下の情を志すも虚無  
僧さうし故ちり返さくも惜むき士を失ひぬるよ美作ハ下の  
心服せざりし少の過ありも能士の二度も三度も知りぬ体  
して猶已がく傍輩は諫せんぬれを美作の政事をくさ  
て泣きくく

東照官小牧は陣しをわりしをせし秀吉兵を分ち中入し開し  
召敵の迹は徒らけり向せし小牧は石川伯耆守數正酒井左衛  
門尉忠次本多平八郎忠勝を殘さし然るは秀吉大軍を出

して長久手に向りかを見つて忠次ハ秀吉の本陣樂田へ押寄火を  
かき攻撃しと云く石川秀吉後ハ變あり聞て彌怒りれん  
と強て押へて止る忠勝ハ秀吉の馬をりしを見るより僅は五百計  
引具し小牧をけり出小川一筋隔て秀吉は相ちりび長久手さ  
馳向ふ路りて足輕を進り鑊砲を打ち一軍せんも秀吉  
見ざる休し取合ハ竜泉寺の前し忠勝馬を川に打入口を洗ふ  
秀吉の鹿の角れ立物の曾を着る大將よ誰見知り問  
るは稱兼伊豫守通朝過し年姉川の軍は武者出立見知て候本多  
平八郎し候と申もあめめ秀吉涙をちりしと流し五百は足ら  
ぬ士卒しりて吾八萬の軍はか合さんとる千死は一生もあさ  
く然る道と隙とせ巴が主君の軍は勝利あせんとの志勇と云